

教職大学院 Newsletter

No. 65

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.7.21

福井の強み分析

国立教育政策研究所 千々布 敏弥

文部科学省の委託調査報告書（「全国学力・学習状況調査において比較的良好な結果を示した教育委員会・学校等における教育施策・教育指導等の特徴に関する調査研究」）の中で、学校別平均点を都道府県別にプロットした散布図が示されている。どの県も全国平均に比べて高い学校がある一方で低い学校もある。その散布図の中で異彩を放っているのが秋田県と福井県だ。全国平均より低い学校がほとんど無く、多くの学校が全国平均を上回る学校平均点となっている。

この散布図は、私がこれまで抱えてきた両県の印象を見事に表現している。両県で多くの学校を訪問し、校長、指導主事、教師たちと交流してきたが、残念な思いをさせられたことが一度もない。どの教育関係者も、どの学校も、水準が高いのだ。

課題のある授業を拝見したこともある。だが、そのような授業を外部からの来訪者に「見せる」ことの好印象が、授業そのものから受ける残念な気持ちを遙かに上回った。教師によって課題が出てくるのは必然であり、それにどう対処しているか、学校としての、教育委員会としての姿勢が明確であることが伝わってきて、学校経営、教育委員会の指導体制に対する信頼感が沸き上がってきた。

ともに水準の高い両県であるが、指導スタイルは異なっている。秋田スタイルは説明しやすい。

「平成25年度全国学力・学習状況調査クロス集計報告書」によると、「授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れえましたか」「授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り

入れましたか」「学級やグループで話し合う活動を授業などで行いましたか」などの項目が学力と有意な相関を示しており、しかも、「よく行った」と回答する学校の割合は秋田県が最も高くなっている。

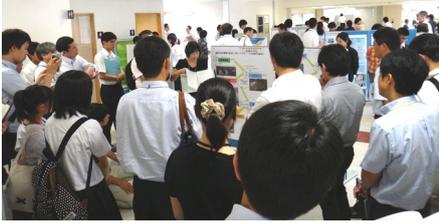
そのような見えやすい強みが、福井にはない。秋田は上記の項目を県の指導方針と掲げ、指導主事が年毎の学校訪問の機会に繰り返し伝えている。福井の指導主事は、一つの指導方針を学校に伝えようとはあまりせず、それぞれの学校の校内研究体制を尊重し、それぞれの学校に応じた指導を行おうと考えている。同様の方針を持つ他県の教育委員会は多いが、結果として学校による隔たりが生じている。私が2011年に全国の小中学校を対象に実施した校内研究実施状況調査では、福井の校内研究体制が最もよかった。福井は県下の学校全体の水準を引き上げることに成功している。その秘訣はまだ探らないといけない。福井の強み分析は面白い。

内容

- 福井の強み分析 (1)
- 実践研究福井ラウンドテーブル特集 (2)
- 福井大学教育地域科学部附属幼稚園
平成26年度公開保育に参加して (17)
- インターンシップ/
週間カンファレンス報告 (18)
- Staff 紹介 (20) 院生紹介 (21)
- 研究紀要・実績報告書の紹介 (25)
- 書評 (27)

実践研究福井ラウンドテーブル特集

2014 summer sessions



Zone A

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ ／教師のやりがい生まれる学校

zone Aでは、テーマ「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」に「教師のやりがい生まれる学校」というサブテーマを加え、「やらされ感」を超える「教師のやりがい」に切り込んで、学校づくりについて考えていくこととなった。

session I ポスターセッションでは安居中学校から、初の生徒による報告が行われた。「朝ラン」「夢授業」「思い出語ろう会」など特色ある取組が紹介され、次々



と投げかけられる質問にも堂々と自分たちの思いを語る中学生の姿が印象的であった。板橋区赤塚第二中学校からも教科センター方式についての取組や安居中学校との交流についての報告もあり、両校の連携の姿も窺われた。芦原中学校や附属小学校、新座高校からは授業研究を柱とした協働の様子が報告され、熱く語る先生方の姿から学校全体が、やりがいを持って取り組んでいる様子がそのまま伝わってきた。拠点校の中藤小学校や至民中学校、丸岡南中学校からは今年度の取組が紹介され、昨年度の課題を踏まえてさらに一歩進んで改革に挑戦していこうとする姿に、こちらも奮い立つ思いであった。附

属特別支援学校から縦割りグループ研究、嶺南東特別支援学校から授業改善の日常化が提案され子どもたち一人一人の姿にやりがいを見つける教師の姿が明らかにされた。どの取組からも、先生方の学校全体を動かしていくパワーとその原動力となるやりがいが感じられ、まさに「やりがい生まれる学校」の実践を様々な角度から報告いただいた。

Session II シンポジウムでは、宇都宮大学の原田浩司先生から、昨年度まで校長として勤務されていた鹿沼市立みなみ小学校の学校改善と教師力の向上について報告いただいた。着任当時いわゆる「荒れ」の状況にあった学校に対し、学習不応答を起こしている子どもたち一人一人に向き合い、その子どもの中の学びへの希望を見出す。危機の背景には、声にならない子どものニーズが潜んでいる。1つの学級の問題を学校の問題として捉え、全学級で足並みをそろえて取り組んでいく。教師が子どもの本当のニーズを見取る力をつけ、授業改善に繋ぐとき、子どもの姿も変容してきたという。朝学習は全員、同じことを強要せず、ついていけない子は希望をとって校長先生自らが図書室で学習支援にあたる。子どものために労を惜しまないこうした姿が徐々に形となり、学校全体が集中する「朝の15分間」をつくりあげた。一人一人の教員は自分のテーマを持って、課題に向き合いつつも、教師集団としての確かな向上も感じられるようになってきた。「美しい花だけでなく、剣山が必要なのです」といわれた言葉が印象的であった。一人の教師のやりがいは他の教師のやりがいにつながり、それが学校改善に繋がる大きなパワーとなったとき、「教師のやりがいを生む学校」となる。また逆に「教師のやりがい生まれる学校」には教師のやりがい新たに育っていく。教師集団が学校を変えていくのであるが、学校改革は教師の意識改革を促すとも言えるのである。管理職として広い視野に立って教師集団を率い、子どもたち一人

一人に真摯に向き合ってきた先生の思いが伝わって胸が熱くなった。

安居中学校加藤学教諭からは「社会参画型学力の育成」という大きな共有ビジョンを掲げて、学校の移転開校というチャンスを活用した様々な改革の取組が具体的に報告された。「夢授業」「ほたる観察会」「思い出語ろう会」などを通して生徒と協働した学校づくりを生き生きと語る姿はまさにやりがいに満ちている。「私にとって学校は夢を叶える場所です」という加藤先生の思いも、初めから全教員にすぐ理解されたわけではない。教員よりもむしろ子どもに働きかけることで、子どものコ



ミュニティが形成され、それが教員のコミュニティに繋がっていく。会場にはたくさんの安居中の生徒たちが集まり、加藤先生の報告を先生としてというよりもむしろ協働参画者として熱心に聴いている。「安居中は仲間と絆を創るところ、先生と交流して自分を高めていくところです」という生徒の言葉に、会場から感嘆の声が上がった。コーディネーターの千々布先生も子どもたちに安居の良さについて問いかけ「仲がいいので互いの意見を言い合えて練り合える。授業中も自分の意見を言えてわかりやすくなった」とまさに授業改革の成果が見える。むりやり全教員を一つにしようとしないで学校が変われば教師は変わる。では学校が変わるきっかけはといえば、みなみ小のような危機意識のあるときであった

り、校長のリーダーシップであったりする。会場からは「では危機意識もない平和な学校で校長先生もこのままでよいと思っていたら？」と新たな問い。「企業なら組織開発を迫られている時代だがその流れもない学校にはやはり授業研究の活性化が一つの切り口で指導主事訪問等是一个のチャンスであろう」と締めくくられた。SessionⅢではSessionⅡに倣って、3会場で管理職とミドルリーダーの報告があり、グループ討議となった。SessionⅡに続くそれぞれの思いがありその感想も含めて「何かをのりこえたときやりがいが生まれるのでは」「学校を変える必要は本当にあるのか」などさらなる深い話し合いが行われた。グループ内ではこのようにしめくくられた。「少なくとも授業を変える必要はある。なぜなら子どもたちそのものが日々変わっており、教



育も日々動いているから。ゴールは子どもの力を伸ばすことであり、やりがいもそこにある。我々が今、まず夢中になって取り組める一つのきっかけが授業改革だろう」誰しも子どものために本当に価値があると実感できれば動き出す。無理のない自発的な改革は、子どもの笑顔を生み出すところから始まるのである。(小林真由美)

Zone A / 長崎県東彼杵郡波佐見町立波佐見中学校 教諭 猪 晃一郎

私は、教師になって17年目を迎えます。17年間の間に、子どもたちをはじめ、保護者、教職員、いろいろな方と出会ってきました。県外に行くことで、さらにいろいろな人々と出会い、つながることができます。今まで、長崎県の教育が、あたりまえと考えていた自分が、他地域の方の話を聞いたり、学校の様子や実態を把握したりすることで、様々なものの見方や考え方があることを知ることができました。

さらに、学校教育関係者だけではなく、他の職業で働いていらっしゃる方の話を聞くことも私にとって、大きな刺激を受けます。

ラウンドテーブルでは、たくさんのことを学ぶことが

できるので、長崎県から往復で約16時間の移動時間がかかりますが、今回、参加させていただきました。

前回、参加させていただいたときは、福井県の教育水準の高さに感動しました。教師が大学院で研修を深め、大学院卒業後は、ミドルリーダーとして、学校現場で活躍できる組織体制がしっかりと構築されていました。学校内に、大学院で研修を深めた教師が複数人いることにも、驚きました。

2回目の参加となった今回は、介護士の方の話を聞くことができました。介護を要する一人の男性との体験談でした。初めて接したときは、そばにいくと逃げていくような感じで、全く介護士を相手にしてくれなかった

が、あきらめずに毎日接することで、次第に男性が心を開き、自分を頼りにしてくれるようになったという実践の紹介でした。信頼関係を構築するための介護士のあきらめない姿勢に、とても感銘を受けました。すべての生徒を受け入れ、救わなければならない学校現場で働く一教師として、相通じることがあり、学ぶことが多い実践発表でした。介護士の方は、私の17年間の教師生活の歩みを聞き、「中学生の時、先生がこういう気持ちで、こんなに大変だったなんて、全くわかりませんでした。」という感想を持たれていました。

このようにラウンドテーブルでは、たくさんの出会いがあり、様々なことを学ぶことができるのです。

半期に一度の開催で、全国の人々の実践を聞き、自分も、もっとがんばらないといけないと自分自身を励ますと同時に、次の機会では、どのような実践を紹介しようかと思うことが、私の日々の仕事のやりがいにつながり、ラウンドテーブルを楽しみにさせていただいている次第です。

このような学ぶ機会をいただき、大変うれしく思っています。関係者の皆様、ありがとうございます。

Zone B 教職大学院をイノベーションする ／教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて

Zone B (教師教育) では、3月に行った「教職大学院をイノベーションする」の第二弾として、「教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて」をサブテーマに、教職大学院の教員としてどのような資質能力が求められ、それに向けてどのような取組みができるのかを考えていった。

まず、Session I のポスターセッションでは、次のシンポジウム、フォーラムにつながるよう、福井大学からは、本学が着手している附属・学部・大学院の融合による三位一体の改革のコンセプトや方向性、教員の資質向上に向けての考え方や取り組み状況を、また、既存の大学院と教職大学院を教職大学院に一本化し新たな教師教育に取り組んでいる長崎大学からは、同大学の現状を紹介していただいた。

Session II のシンポジウムでは、最初に文部科学省の森氏から、教員養成に係る現状と課題、教員養成の改革と現状、国立大学の機能強化、大学院段階の教員養成の状況と教員養成の改善・充実に向けての最近の国の動きの詳しい報告があり、テーマに関わる全体像を示していただくとともに教職大学院への期待の大きさも確認できた。次に、静岡大学の梅澤氏からは国立大学改革による新教職大学院に向けての現状や課題、特に教育学研究科と教職大学院の新しい設置基準に関し、修士課程と教職大学院の両方のニーズにどう対応するかについて、具体的な問題提起と提案がなされた。次に、これまで長く教職大学院の創設に関わってきた村山氏は、もはや個々の教師の情熱や力量だけで学校が成立する時代ではなくなり、教師の個人レベルの力量だけではなくチームで対応できる力量の形成も重要であること、また、学校改革の一環としての教師力の向上が大切であり、教職大学院がその学校改革と教師教育の要とならなければならないことを熱弁された。更に、そのためには、理論と実践の往還を保障する学校拠点方式や、学校実践を探究的に省察

することの重要性を強調され、本学が取り組んでいる実践を高く評価していただいた。最後に、本学の岸野准教授が、「学校協働研究と教師の専門性の向上を支える実践コミュニティにおける力量形成～福井大学教職大学院のFD～」というテーマで、多様なバックグラウンドを持つ教員がチームとして協働で探究する場が豊富にあり、協働して実践するコミュニティの中で力量が形成されていく本学教職大学院のシステムを、具体的な実践例をもとに紹介した。

Session III では、前半は、福井大学教職大学院での具体的な取組について4人から話題提供があった。まず、森田准教授が、附属学校で実際に教鞭を執りながら大学院にも籍を置く立場から、自身の「研究実践者教員」としての現状や課題、今後の展望についての考えを述べた。次に、教育委員会との人事交流教員としての立場から、福井県との交流教員である私が「実務家教員としての学びと教育現場への波及」について、また、長野県との交流教員である宮下准教授が「今、私に起きていること」として、日常的に展開する協働の実践活動における自身の気づきや学びについて、率直な思いや考えを語った。最後に、山崎特命助教が、本学教職大学院が今後取り組む予定であるE.d.D.について、英米の状況と、今後の展望や課題を話し、後半のグループ協議に入った。

グループ協議では、session II, III を受け、教職大学院においては教師のどのような資質能力が求められ、資質能力向上に向けていかなる取組みの可能性があるのかについて熱心な議論がなされた。各グループでの時間は十分には確保できなかったかもしれないが、方向性は見えてきたのではないかと思う。このBゾーンで共有されたディスカッションが、参加者の皆様にとって、今後の具体的な取組みにつながっていく有意義なものであったと確信している。(二宮秀夫)

Zone B / 宇都宮大学教授 教職センター副センター長兼教職企画調整室長

瓦井 千尋

6月21日(土)、22日(日)の二日間、福井大学教職大学院が主催するラウンドテーブルに今回初めて参加させていただきました。4つのゾーンと5つのセッションを貫く共通のテーマは、『実践し省察するコミュニティ』。

さて、今回私は、4つのゾーンの中から迷うことなく、「ゾーンB 教師教育：教職大学院をイノベーションする」を選びました。その理由は三つありました。

一つは、昨今、教員養成改革を推し進める上で、特に大きな期待が寄せられている教職大学院について、福井大学教職大学院が現在どういった取り組みを行っているのかを自分の目と耳と肌とで体得したかったからです。

二つ目は、サブタイトルの「教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて」で議論される内容が、近々、我が宇都宮大学にとっても、喫緊の課題になってくるに違いないと想定したからです。

そして三つ目は、福井大学教職大学院への現職派遣教員の確保をはじめとする大学と県教委、地教委等との水面下における具体的な折衝をどのように行っているのか等について御教示いただこうと思ったからです。

一つ目の教職大学院の取組状況については、松木健一先生から、別途、単独でポスターセッションを行っていただき、つぶさに御説明を受けましたので、福井大学ならではの取組の状況がよく理解できました。

このことを踏まえて、私の二つ目の課題にかかわるゾーンB 教師のセッションIIのシンポジウムに臨みました。ここでは、4人のシンポジストから問題提起や調査報告、行政説明等が行われました。特に、これまで長く教職大学院設置に奔走されてこられた村山先生(北教大)の熱い思いがヒシヒシと伝わって参りました。文科省からの認可が下りれば、来春、我が宇都宮大学にも教職大学院が設置されることになるので、大変参考になるシンポジウムでした。

引き続き行われたセッションIIIのフォーラムは、中身の濃い議論となりました。私と同じく県教委の次長職を退任後、福井大学教職大学院のスタッフとなられた松田先生の巧みな進行の下、文科省の森室長補佐、我が宇都宮大学と同じく来春、教職大学院の開設が予定されている大教大の富田先生、そして新進気鋭の山口東京理科大の畑中先生との有意義な意見交換ができました。

二日目のクロスセッションは、朝8時30分から午後2時までの数時間、6名の小グループの中で、3名の実践報告等を基に昼食・休憩をはさんで熱気のある話し合いの場がもたれました。教職を目指す学生・院生さんの素朴にして根源的な質疑や悩み等が印象に残りました。

二日間、大変有意義な時間を過ごすことができました。福井大学の関係各位に衷心より感謝申し上げます。

Zone C 学び合うコミュニティを培う

Zone Cでは、今回も福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR福井駅東口前のAOS SAでの開催となりました。Zone Cは、地域コミュニティの発展を支える自治と学習およびそこでのコーディネーターの役割をテーマとし、実践交流を積み重ねてきています。特にここ数年は「地域コミュニティ」とそれを支える実践者から成る「組織としてのコミュニティ」の双方が持続可能である仕組みを整えていくことを指し「持続可能なコミュニティをコーディネートする」という課題に取り組んでいます。

session Iのポスターセッションでは、福井県内の公民館、福井ローターアクトクラブ、福井大学探求ネットワークといった34もの多種多様な実践が会場となりました。そこでは、探求ネットワークの学生が公民館

の方に自分達が考えている企画アイデアを聞いてもらうといった次のアクションにつながる出会いも生まれていったようです。

session IIのシンポジウムでは、福井市森田公民館主事の吉田智子さんと、福井新聞社のコウノトリ支局記者の伊藤直樹さんをシンポジストに迎え、前回に引き続き「持続可能なコミュニティをコーディネートするーコミュニティをひらき支える広報と記録ー」というテーマに取り組みました。おふたりの実践報告を通じて、広報がつくられていくプロセスを大切にしていくこと、そして、それを積み重ねていく中で広報の持つ意味も少しずつ変化していく様子が共有されました。

session IIIのクロスセッションでは、シンポジストの問題提起を踏まえ、6~7人ほどの小グループで、地

域・世代・分野を超えた活動の交流と共有を行いました。今回福井大学の学生の報告が多いという特徴があったのですが、学生の実践に公民館のスタッフ、企業の方、地域住民の方々がじっくりと耳を傾け、そこに新た

な意義を見出したり次の展開につながるアイデアが生まれたりする場面があちこちのテーブルで起こっていました。session I・II・IIIを通じ「学び合うコミュニティ」が体现されたZone Cでした。（半原芳子）

Zone C／お茶の水女子大学社会教育主事講習受講生 坂本 一馬

今回で2度目の参加となった福井ラウンドテーブル。実践報告者として参加した私にとって、「支援者としての自分の立ち位置」がどこなのかということを確認したラウンドテーブルとなった。

今回は、東京都杉並区で社会教育専門嘱託員として担当しているいくつかの青年活動団体の中間支援の実践について報告した。特に、私の支援のあり方を「共に創る」ことへ転換している実践について報告したのだが、なんと他の報告者の方も「学びあい」という“上意下達・一方通行ではない”という点で、私と近いテーマを報告されたのだ。その方は小学校の教員をされている方で、教師の一方的な「教え」ではなく、子どもたちの「学びあい」で授業を運営できるのではという思いで実践しているようだ。

このラウンドテーブル自体も、「実践し省察するコミュニティ」というタイトルで開催している通り、互いに学びあうコミュニティをどう形成していくのかということが大きなテーマといえるだろう。その点では、社会教育を専門としている私と小学校教育を専門にしている方とで、「共に創る」「学びあい」という近いテーマが

話題になることはある意味当然なのかもしれない。

けれども、違う専門領域での実践ならば、その違いはどこに表れるのだろうか、帰りの新幹線の中で考えてみた。

それは、立ち位置の違いではないだろうか。学校では教員と子どもという直接の関係であるのに対し、私はコミュニティを通して間接的に活動者を支援する立場だ。とすると、「学びあうコミュニティ」がより良くなるためにさらに「学びあうコミュニティ」をつくることが私の役割だ。と、ここまで考えたところで東京駅に着いた。

このラウンドテーブルでの発見をきっかけに、現在中間支援のあり方について再検討を行っているところだ。これまで私が「支援」であるといっているところを洗い出し、かつ、活動者にとっては何が「支援」であったのか、支援側と活動者側の双方向で整理を進めている。検討のスピードは鈍行列車なれど、「支援」ということの根元的な問いを持ちながら、着実に「共に創って」いきたい。

Zone C／福井大学教育地域科学部社会系教育コース3年

寺島 亮太

今回、私は実践研究福井ラウンドテーブルに参加した。今回で3回目の参加であり、報告も2回目だった。今まで参加してきて、私が発表するしないにかかわらず、何かしらの学びを得てきた。もちろん、今回も同じであり、とても有意義な時間を過ごすことができた。以下、簡単に2日間で得た学びについて述べていきたい。

1日目は、Zone Cに参加した。「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマの下、ポスターセッションやシンポジウム、クロスセッションに参加した。ポスターセッションでは、私が実践している探求ネットワーク（以下、探求）や、公民館の報告を聞いた。地域に根差した公民館活動の報告は興味深いものであった。またシンポジウムでは「コミュニティをひらき支える広報と記録」ということで、いかにして地域の理解を得て、それを記録し、広報していくのか、そのあり方について考えさせられた。そして、クロスセッション

で私は、実践していることについて報告した。2日目は、1日目のZoneに関係なく少人数に分かれての、実践報告だった。この場でも、私は報告した。大学教授や中学校の先生もいらっしや、有意義な時間を過ごすことができた。

さてここからは、報告の中で具体的にどのようなコメントを得られ考えたことについて述べていきたい。まず、探求の知名度の低さである。今年度探求は20年目を迎え、規模も大きい組織となった。しかし、それでもこの実践を知っている人は少なく、県内の先生や公民館の方たちでさえ「福大ではこのような実践がされていたのか」と、あまり知られていない。これは、とても残念なことである。しかしこの現状は、これから探求がよりよい組織になっていく可能性があることを示している。ここで広報の在り方をとらえ直し、よりよく探求の情報を発信していけば、今までにあまりなかった公民館や地

域の方々と連携した活動というものを創りあげることができるのではないか。このラウンドテーブルも、その広報の場の1つとして捉えることができる。この場で探求を発信することで新たなつながりが生まれ、双方にとっていい影響が生まれるに違いない。実際に今回参加している公民館の方とつながりができ、私が所属するかみすきブロックが地域で講座を開くことが決定している。このようにつながりが生まれれば、より探求が広く認知され、地域に支えられる組織へと発展していけるのではないか。その可能性について、改めて考えさせられた。

では、どのようにして探求を発信していくのか。発信する場としては、このようなラウンドテーブルなどの場で行えばよい。しかし、単にポスターにまとめて発表するだけでは不十分だと考える。そこで重要となってくるのは、実際に活動している私たちスタッフの実践記録だ。探求での実践を通して、子どもたちはどのような力を身に付け、スタッフはそれにどのように介入し、学んだのか、そして意味づけをしたのか。それを記録化し、発信していくことが今後より一層求められると思う。今回私が報告していくなかで、「どうやって、子どもの学びを記録している?」「あなたが今までの実践を、どう意味づけしてきた?」と聞かれることがあった。このコメントに対して、私は自分の考えを上手く伝えることができなかった。これは、私がしっかりと今までの実践を意味づけし、記録化できていなかった証拠である。探求での実践は、これからの自分にとってためになるものである。それなのに、今の段階ではそれを自分のものにはできていない。今回をきっかけに、いかに自分の学び、子どもの学びを意味づけしていくのか考え、それを記録化していきたいと感じた。

さて、以上が今回ラウンドテーブルに参加して得た学びである。いつも感じることだが、こうした学びというのは、探求内だけでは気づかないことが多い。視点を変えて捉えてみると、新たなことに気づくことができる。だからこそ、今回のような場での情報発信による、外部の視点を大事にしていきたい。

最後に、春サイクルについて述べていく。ラウンドテーブルから2週間、春サイクルの集大成であるミニなままつりが開かれた。ここでは、子どもたちが日ごろの活動の成果を他のブロックや保護者、地域の方に発表する。子どもたちにとって普段経験しないことでありいい機会であるが、なかなかうまくはいかない。そこでスタッフとしては、雰囲気づくりを大事にしていきたい。子どもたち、特に自分のブロックの子どもたちにとって、発表することに対して苦手意識を持っている。そのような子どもたちが発表できるようになるためには、安心できるような雰囲気を作ってあげることが大切になってくる。発表を聞いてくれる環境、失敗しても大丈夫だと思うような温かい雰囲気、発表がしたくなるような雰囲気。そのような中で、子どもたちは普段と違う活動にも、勇気を出して取り組んでくれるのではないかと、3年間活動してきて見えてきた。今年度の春サイクルの子どもたちは、昨年度までとは少し違う、成長した姿が見られた。そのような姿を見られたことをうれしく思うと同時に、それらをもっと磨いてよりよいものにしてほしいという願いを今持っている。春サイクルでの学びをこれからの振り返りで意味づけ、さらには記録化し、夏サイクル以降の活動へとつなげていきたい。

Zone D 授業改革の扉を開く ／質の高い学びを生む問いとは?

Zone Dでは、前回3月のラウンドテーブルのテーマ「問いはどこから生まれてくるのか」を受け、今回6月のテーマ「質の高い授業を生み出す問いとは」を、ポスターや写真、動画を使った実践発表を78名の参加者と共有し、協働で省察することによって探究した。ポスター発表は4つ有り、1つ目の福井大学美術サブコースの学生は、世界各国の特徴的なアプローチをもつ美術の実践を紹介し、「あなたはどの国の美術の授業を受けたか」という問いを聴衆に投げかけた。2つ目の大河内小学校の古屋先生は、ふりかえりノートや保護者参加などを核とした学び合いの実践、3つ目の特別支援学校の柳沢先生は、異学年が協働で学ぶレインボータイムと呼ばれる縦割り集団による協働的な学習によって学びを深めた実践、最後は荒土小学校の大塚先生から、単作りを

するセキレイのライブカメラなど身近な生き物の生態に児童がいつでもアクセスできる学習環境を作り、そこから環境や理科の学習の問いを生み出す実践が紹介され、聴衆と活発な議論が行われた。

古屋先生のふりかえりノートの実践についてもっと詳しく聞きたいという要望が多数有り、シンポジウムの合間に時間を設けて説明してもらおうなど、大変盛り上がった。

シンポジウムでは3つの発表があった。まず森田中学校の南部先生は、そもそも「教師は授業で本当に問いを発しているのか」について指導主事時代に集めた膨大な数の指導案を全て調べ、問いが明記されている指導案の割合が全体の1割程度しかなく、しかもそのうちの4割近くを理科だけで占めているなどの事実を明らかにした。また、Zone Dのテーマの「問い」を、「授業の骨格を

つくる発問」と定義した上で、子どもの生活の論理と教科の論理のどちらの視点に近い問いかなど、問いには様々なものが有ることを指摘した。

このような問題提起を受け、質の高い学びとはどのようなものか6人の小グループで考えを出し合ったり、全体で考えを共有しながら、質の高い授業における問いの重要性について、一人一人が理解を深めることができた。

2つ目はカリタス小学校の加藤木先生から、6学年の「総合&国語」の実践報告「宮澤賢治の世界へ～銀河鉄道の夜をプラネタリウムで表現しよう～」が報告された。プロジェクト型の総合的な学習の中で、自前のプラネタリウムを創るという長期スパンの探究において、子どもたちが様々な困難にぶつかり、問いの答えを探し求める姿が映像を使って生き生きと紹介された。

3つ目は敦賀気比高校の滝田先生から、「なぜ僕たちは美術を学ぶのか」という生徒の問いの答えを教師が生徒と共に苦悩しながら探し求める授業づくりという探究が紹介された。まさに人は問われて考えるのだ。そこには「言葉だけでは表せないことを美術は表現できる」と美術を学ぶ意義に気づく生徒の成長に、うれし涙を流す教師の姿があり、それに共感して感動し涙腺が緩む聴衆の姿があった。

いずれの発表も具体的な活動に基づいて、他者との協働探究により実感を伴った理解を深めていて、授業の後に子どもに何が残るのかについても考えさせるものであった。(小林和雄)

Zone D / 福井市森田中学校 教諭 南部 隆幸

「学校現場はこれほど忙しいものか」と五年ぶりに教育委員会から中学校に戻って実感している。1人1人に対する手厚いケア、学級集団に合わせた授業設計、質の高い授業を目指した時、教師の仕事に果てはなくなる。毎日子どもとのやりとりの中で、今まで持っていた授業に対する見方・考え方が絶えず揺さぶられる。あたかも、どんぶりの中に入れた水が溢れんばかりに波打つようだ。学校で日々の授業をこなすだけでは溢れそうな水を心配するだけの繰り返しになるが、今回、ラウンドテー

ブルで「授業の問い」について発表の機会をいただいたことは、「えい、やっ」とどんぶりの壁を乗り越える良いチャンスとなった。

言葉にすること、語ること、文にまとめることは、教師として新しい器を得るために大きな意味を持つ。さらに、小グループでは自分の話を聞いてくれた方々から、いろいろな意見を聞くことができた。中には対立する鋭い意見もいただいた。自分の授業観がさらに深まるのを感じる1日となった。

Zone D / 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 教諭 柳澤 秀樹

Zone Dで、「授業改革の扉を開く」というテーマで、本校の「縦割り集団での学びを深める」という研究について、ポスター発表させていただきました。

全校縦割り班活動の始まりから現在の「レインボータイム」に至るまでの流れや過去2年間の研究をいろいろな班の活動写真や図表を見せながらお伝えしました。

昨年度から取り組んでいる教師の「しかけ」では、「縦割り集団の学びを深めるために、教師がどんなことを子

どもたちに願って働きかけているのか」という質問を香川県の小学校の先生からいただきました。その中で、子どもたちの発達段階ごとに「培いたい力」を整理しながら、縦割り集団の学びを意識して研究していることを説明しました。縦割り集団での活動が、通常教育の中でも重要視されていることを改めて感じました。

Zone D / 勝山市立荒土小学校 教諭 大塚 雅洋

ラウンドテーブルには、2014年3月と6月の2回参加しました。最初は1回だけ参加するつもりでしたが、紹介された実践例を数人グループで多面的に分析したり、自分の実践と比較しながら、議論を重ねていく面白さに興味を持ちました。討議するメンバーは校種や専門教科が違う教員で構成されているため、自分が取り組んだことがない実践を参加者から知ることができたり、『学

び』の共通点に気がついたり、自分の考え方やものの捉え方を深めることができました。2回目の参加は、自分が現任校で行ってきたICT機器を活用した実践を発表してほしいという依頼がきっかけでした。普段の授業の中でICT機器を用いて視覚に訴える授業をしてきました。特に、理科では、身近な環境を記録したオリジナル教材を作成し、児童に自分たちが生活する地域の自然と生き物

の命のつながりに関心を持たせる実践報告をしました。発表後、多くの先生方から「すごい」という高評価をしていただいたことは、自分自身の励みになりました。これか

らもICT機器を活用した授業や教材を作成し、児童の興味関心を引き出す授業を考えていきたいと思います。

Zone D / カリタス学園カリタス小学校 教諭 加藤木 智子

1日目は「Zone D授業」に参加させて頂き「質の高い学びを生む問いとは？」というテーマのもと実践発表を、2日目には小グループで実践の語り合い、聴き合いをさせて頂きました。自分の実践に対し、テーマに即して目的を絞り、分かり易く語ることの難しさを実感しました。同時に、実践を振り返り語りことやそれに対しての質問に答えていくこと、他の先生方の実践や様々な考えを聞くことで、自分自身もつ教育観にも改めて気付かされました。

また、自分とは校種や立場が全く異なる方の多様な実践報告であっても、聴き合い、語り合う中で、「自分のあの時の実践と重なる部分があるな」「あの時の悩みと似ているな」「あの時のあの子の反応と似ているな」など、共通性が見えてくるのが大変面白かったですし、良い学びとなりました。更に、自分も頑張ろうと良い刺激を頂きました。

「質の高い学びを生む問い」とは何か、今後も自分自身に問い続けていきたいと思っています。

Zone D / 福井県教育庁義務教育課 授業力向上グループ 理科指導主事 三崎 光昭

豊富な経験と学び続ける意欲にあふれた先生方の熱心な協議に参加させていただき、充実した時間を過ごさせていただきました。特に山梨県の古屋和久先生の言葉は、実践に裏付けられた重みと説得力がありました。

『質の高い問いは質の高い学びを生み、質の高い授業となる。質の高い授業を受けた子どもは、授業で考えたことを家に帰って保護者に語るようになる。保護者は子どもの学校での様子が分かるようになり、子どもの成長を感じるとともに、学校への信頼感をもつようになる。授業

について子どもが自分の言葉で語ることは、学校にとって1番の発信力となる。〇〇通信やHPも良いけれど、子どもの言葉ほど影響力の大きいものはない。』学ぶことに夢中になっている子どもと、保護者が学びに参加している姿が目につかぶようでした。

古屋先生だけでなく、多くの先生方が、このラウンドテーブルで、自分たちの実践を語り合い、刺激し合う。実に質の高い時間が流れていました。

Zone D / 嶺南学園敦賀気比高等学校 美術科講師 滝田 知佳

〈私達はなぜ学ぶのか。〉人は、自分のすることの意味を問い続ける生き物です。教師、または教師を目指す私達にとって「質の高い学びを生む問い」とは、日々の悩みであり、同時に大きな可能性につながる学びの根源でもあります。年齢や職業、地域、教科の枠を超え、Zone Dに集まった私達の熱意の渦は、まさに一つの方向性を生み出そうとしていました。

〈子どもたちの『その先に続く学び』とは。〉今回の対話の中で行き着いたこの問いの中に、本題の核心をつく重要なキーワードが隠されているように思いま

す。私達はもう一度、この問いを教師自身の問題として捉え、それぞれの現場に持ち帰ることによって、さらに具体的なActionを生み出していく必要があります。

教師という学びのプロとして、目の前の子どもたちに何ができるのか。この研究会に参加させていただくことで、日々の忙しさの中に置き去りにされていた大切なことに改めて気づくことができました。これからも挑み続ける教師でいたいと思います。沢山のエネルギーをいただき、本当にありがとうございました。

Zone D / 身延町立大河内小学校 教諭 古屋 和久

夏と冬は各地で開催される研究会にお声をかけていただくことが多いのですが、実践研究福井ラウンドテーブルには、初めて参加させていただきました。

私が感じたラウンドテーブルの最大の魅力は、一つひとつの授業実践にじっくり向き合えることです。実践の内容はもちろん、実践者である教師の教育観、これまでの

教師としてのあゆみ、お人柄にも向き合うことができる研究会だと感じました。2日目のクロスセッション、1日目の研究会と、少ない人数でテーブルを囲み、共有した実践を通して、聴き合い、語り合うことができました。学生さんや院生さん、研究者、教育委員会で指導的立場にいらっしゃる方、現職教師など、テーブルを囲む一人ひとりが、同じ立場で参加し、自分の言葉で語り合う場は、教師としての自分自身に向き合う場ともなります。

このような研究の場を、福井大学教職大学院が提供していることも重要だと考えます。教師は、現場で出会った「問い」を、「教育現場」という閉じた世界の中だけで考えるのではなく、アカデミズムの世界につなげながら、その答えを探求していくことが必要だと思います。教育現場とアカデミズムの世界との出会いの場としてのラウンドテーブルに、大きな魅力を感じています。

Zone D / 福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース 2年 山田 夏乃

美術教育は『生きる力』に必要なのか？ —ポスター発表者として、ラウンド参加者としての視点を通して—

私達は、美術科教育法Ⅰの授業で中国、フィンランド、日本の美術教育を比較検討した結果、最終的に「美術教育は『生きる力』に必要なのか？」という疑問に行き着いた。担当の濱口先生は「この間に美術教師は答えられなければならないよね」とおっしゃり、後日、私達は今回の授業の内容をラウンドsessionⅠという大きな場でポスター発表を行うことになった。

今回の発表、ラウンド参加は、私達が美術教育の根幹と深く関わるきっかけになったと強く感じる。さらに、多くの達成感と充実感、さらにそれに伴う疑問を得ることができ、今回は特に強く感じたことを述べていきたい。

まず、ポスター発表で大事にしたことは、上記で述べた3国の美術教育の違いを見ている人に気付いてもらうことである。「あなたはどこの国の美術教育を受けてみたいですか？」とポスターに大きく提示し、発表の中でも見ている人にも積極的に問いかけることで聞いている人にもより深く3国の違いとそこから分かる日本の美術教育の特徴を考えてもらうというねらいをもって臨んだ。

発表の際、気づいたことは、こちらからの問いかけに対して、聞いている人はあまり反応してくれなかったことだ。「この教科書をみてどう思いますか？」と聞い

た時、返してくれる人もいたが、こちらが当てるが多かったように感じる。

また、聞いている人にどこの国の美術教育を受けたいか？と問いかけることで、私自身も発表を聞いた人がどう思うのか聞いてみたかったが、残り時間とこちらの問いかけが不十分で引き出すことができなかった。その二点が非常に残念で心残りであったので、今後の展開に活かしていきたい。

また、sessionⅢの場では、「美術は『生きる力』に必要なのか？」という問いかけに似た「先生。なんで美術ってせなあかんの？」という子どもの声をきっかけに授業の見直しを行なった、滝田先生の実践記録を検討する時間があつた。それは、自分達の疑問にもあつた「美術は『生きる力』に必要なのか？」という問いかけにとっても似ていたもので、自分自身と照らしあわせてその疑問を考えることができた。私が今強く感じているのは、子ども達に「こういう力をつけてほしい」と願うのなら、子どもたち自身の学びの初期段階にある「なんでこれ勉強せなあかんの？」という問いを邪険にせず、応えることが大事だということである。では「何故美術をしなければいけないの？」「美術は必要なのか？」という問いに後ろ向きになるのではなく、私はその都度丁寧に応えたいし、自分自身にも常に問い続けていきたい。

Zone D / 福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース 2年 三好 愛

仲間とともに考える

今回私たちは「あなたはどこの国の美術教育をうけたいですか？」をテーマにポスター発表を行った。たくさんの現職の教師の方々を目の前にして教育について話す、ということもあり、これで通じるのだろうか、本当は間違っているのではないだろうか…と不安と緊張が入り混じっていた。そうした不安要素を取り除くためにも、毎日ああでもない、こうでもない発表メンバーで

の話し合いが続いた。思えば、こんなに同学年の仲間と美術教育について話をしたのははじめてではないかと思う。私たちは普段美術教育サブコースという場所に所属し、共に生活をしているが自分の制作について語り合うことがあっても、教育についてなかなか話し合う機会は少ない。みんなひとつの物事に向き合い考え、答えが出た！と思ったらまた話していくうちに疑問が生まれ、そして本当にそうなのかと話していくうちにまた新しい疑問が生まれていく…というように持続的に疑問をもち続

けていく時間になった。それはまるで持久走のようでとても体力が必要で辛いのだが、進めば進むほどはじめは全く見えなかったゴールに近づいていく感覚が自分のなかにありとてもわくわくした。

セッションの中では「質の高い問いを生む授業とは？」をテーマに現職の先生方のなかに混じり考えていった。私はまだ教師として児童の前に立ったことがないので、教師側の視点というのは聞いた話や想像でしかない。そのため今までの自分はまだ実践経験がないから…よく知らないから…という理由でどこことなく遠慮してしまい、問いと真剣に向き合うことから逃げていたのではないかと思った。今回のポスター発表を通して分かったのだが、自分が真剣に考えて見つけた意見だから

こそ聞いてほしい、間違ってもいいから伝えたい、という思いが出てきて話し合いの中に飛び込んでいけるのではないだろうか。今あるこの環境が、問いが、自分自身の問題としてきちんと受け止めることが出来たというのは大きな収穫となった。

また、ポスター発表をするまでは、これだ！と納得できる答えが自分の中にあっただがいろんな先生の話や聞き意見を交わせば交わすほど、どんどん新たな疑問や感情がわいてきて、本当に自分が思っていたことは正しいだろうか？もっと違う何か見出せるのではないだろうか？と疑問がわいていった。これからもっともっと、美術はもちろん教育というものの中にもぐってみたいと思いました。

Zone D / 福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース 2年 中村 葉

session II・IIIの私のグループは現職の教師の方が3名、私を含め学部生が2名で、ほぼ教師の方3人で話しが進められていて、私たち学部生は話を振られたら答えるということを繰り返していた。特にsession IIでは、まだ授業者の立場に立ったことのない私たちには入ることができない内容であり、私は3人の話をただ聞いているだけでいいのだろうと複雑な気持ちでいた。

そんな気持ちで迎えたsession III。滝田先生の話で複雑な気持ちも吹っ飛んで行った。滝田先生は私たち美術科4人が本当は伝えなかった「美術って必要だと思いますか？」という質問を堂々と投げかけたのである。

まだ滝田先生がどのような話をするかわからなかった導入のときに、先生は「続きましてっていうのが学生のとき嫌いだったので1分後に私話し始めますのでみなさん好きにしてください」という発言に衝撃を受けた。この人は学生の頃の気持ちを忘れていない、と思った。特に、最近の私は、授業者の立場でしか考えてないような気がする…という考えを持っていたのでとても驚いた。そして、「なんで美術するの？」と、でかかどスクリーンに映し出され、この人すごいなと感覚的に感じた。滝田先生の実践や話を聞いていくと教育学部を出ていないからこそできる活動だったり、子どもとの関わり方が見えてきたりした。私はこの学部へきて、自由な発想が、色々な文献や資料などの検討によって縛られていく感覚に去年から陥った。だから滝田先生の自由な発想や楽しそうに授業する様子、子どもたちとの関わり方

が本当にうらやましく思えた。私もいつまでも縛られていないで初心に帰らないといけなくて心から感じた。また、自画像の話をしている中で思ったことは、先生の美術に対する、教育に対する固定概念を一回外すことで子どもの目線が見えたり、子どもの表現の幅が広がったりするのかもしれないということだ。

滝田先生の「なんで美術が必要なの？」という問いはあの教室にいた全ての人の心を動かしたように感じた。始まりのとき関心なさそうに前を向いたり、下を向いたり何かしていた人たちが全員顔を上げて滝田先生の方を見ていた。その光景をみて、「もしかしたらこの考えを広げていったら今の日本の教育が変わるかもしれない」と感じた。

最後に生徒達から滝田先生への文章を読んでいた時、「美術って必要なんだ、よかった」と私もうれしくて泣きそうになってしまった。

そのあとグループへ戻ったとき、初めにあったへだたりがなくなり全員同じ土俵で話ができる雰囲気になっていた。そこでグループの教師の方に「美術は必要だと思う」と言われて、これから頑張っていこうと思った。

「なんで〇〇は必要なのか？」という質問を改めて考えることが、質のいい、子どものための授業づくりに繋がるのかもしれないと感じた。私も常に、美術はどうして必要なのか、という問いを持ち続けると同時に初心を忘れないことを大切にしようと思えた、とても学ぶことの多い時間だった。

Zone D / 福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース 2年 西本 晃生

今回のセッションを通して現職の先生も子どもに良い授業をできているか悩んでいるということが分かった。彼女らの話を聞くと、「～をしよう、できるようになる

う」という目標を設定した授業ばかりをしていたので、「～できるのだろうか」と問う課題設定をする授業の話を聞いて驚いたようだ。それを聞いて美術の授業でどん

な「問い」をだしていけるのか疑問に思った。

滝田さんの話を聞いて、美術はなぜするのかという「問い」や「じっくり」と「思い切り」の2つの展開などは、ポスター発表の時に自分たちの話の中でた疑問と悩んでいることが同じであり、自分たちの課題は現場の学校と繋がっていたのだと思った。自分たちの考えていることがこれからの授業づくりに活かされていくのだと感じた。美術がヘタで嫌いだったという先生がいて、そこから子どもの頃は楽しいだけで満足できるが大人になると技術を使って伝えたいから生まれる葛藤ではないかという意見が出た。滝田さんのクラスにも嫌いな人がいたがこれに通じていると感じた。

最後に質の高い学びを生む問いについて考え、私の班では先生が子どもから気付かされる、先生も子どもから

学んでいく授業から質の高い学びが生まれるという結論が出たがまだ納得がいかずまだよく分からないまま終わった。また最後に「良い先生になってください」と言われたので「どんな先生が良い先生なのか」と聞き返したら、「情熱をもって学んでいく先生」と答えられた。

今回のセッションを得て大学でやっていることは現場とも繋がっていて活かされるのだと気づけた。これからの課題として美術が身近でないから敬遠されがちだという滝田さんの話を聞いてポスター発表からでた自分たちの課題をより一層展開していきたいと思った。また美術の問いとは何か探っていきたい。

実践研究福井ラウンドテーブルに参加して

大阪E C O動物海洋専門学校 山下 真澄

学びの振り返り

今回、福井ラウンドテーブル2014 summer sessions (6月22日)に参加し、実践報告する貴重な機会を得た。ラウンドテーブルでは、小グループでそれぞれの教育実践をじっくりと語り、聴き合い、学び合うことに取り組む場である。報告者として60分で何を語るべきか試行錯誤した。その準備過程で、改めて大阪教育大学夜間大学院での学びを振り返ることができた。

大学院在学中は、各科目の繋がりや関係性をじっくり考えたことがなかった。当時はそのような余裕もなく、とにかく授業に出席し、課題をこなし、最終レポートを書いて修了に必要な単位を取得することだけを考えていた。今回、自分自身の実践を語るにあたり、各授業で課せられたレポートを読み返す中で、大学院で受講した各科目の意義を再確認することができた。そして、スクールリーダーコースでの学びを包括的に理解し、今更ながら自身の成長を改めて実感できた。今回のような機会がなければ、大学院での学びを振り返ることがなかったかもしれないと思うと、お声掛けいただいた大脇教授には感謝の気持ちでいっぱいである。

報告「動物ガイドができる飼育員の育成」

私の報告は、「専門学校における教育活動ができる動物飼育員の育成」である。修士論文で取り組んだ内容をふまえて、専門学校の実践を語ることにした。勤務校は動物系の専門学校で、業界が求める人材を業界と共に育成すること目指し、実学教育と人間教育に重点を置いた授業を展開している。いわゆる「産学協同教育」

がテーマである。

私が参加したグループのメンバーは、大学院スタッフ(福井大学教職大学院)、中学校教諭(福井大学附属中学校)、小学校教諭(長崎県佐世保市)、大学院生(福井大学)と私の5名であった。そのため、専門学校の紹介や特性について学校パンフレットなどを使用して、少し時間をかけて説明した。その一つは、学校職員と授業を担当するプロ講師の関係性である。

本校では、学校職員はカリキュラム開発やクラス運営など専攻のマネジメントを主な業務としている。授業は、業界で活躍している専門家(プロ講師)から直接教わる仕組みとなっている。プロ講師は、専門的な知識・技術に関しては一流であるが、教育のプロではない。そのようなプロ講師に、学校の考えを理解してもらい、協働して教育活動を行なってもらうことが学校職員の課題となっている。

この課題解決の取り組みを、大学院の「スクールリーダー実践論」(木岡一明教授・名城大学大学院)で立案し実践したので、紹介した。その方法は、木岡教授流の特質分析(組織心理と組織マネジメント)によって学校の特性と問題点を整理し、SWOT分析によって戦略を立て、その解決に向けた実践計画を立てるものである。一連の分析の結果、大切なキーワードはコミュニケーションであった。本校の強みは、業界との幅広いコネクションと、業界から依頼される企業プロジェクトを取り入れた「産学協同教育」である。プロ講師には、そのことに気づいてもらうために、意見交換できる機会を提供することが重要である。そこでは、授業で立案し

た改革案を決定事項として伝えるのではなく、特質分析やSWOT分析をプロ講師と一緒に実施し、主体的に改革案を作り出していくのである。ここでは、学校職員はファシリテーターとなり、講師間の意見交換がスムーズにいくよう支援する。そして、みんなで作成した改革案は、学校の基本方針をふまえて講師自ら主体的に活動していく「雨傘マネジメント方式」を基軸に、講師をサポートしていくのである。

勤務校の特性や課題解決の取り組みに触れた後、「動物ガイドができる飼育員の育成」を目的とした「動物ガイド実習」について話した。この実習は、動物施設で一般来場者を対象に、担当動物について約15分間のガイドを行う産学協同型の実践実習である。学生は5～6名のチームで、約4か月かけて準備を行う。これまでは、学生が実施するガイド内容について評価基準がなかったため、指導が困難であった。そこで、ガイドの技能項目をリスト化し、数値評価できる評価シートを動物飼育員とガイド指導者と共同して開発した。

今回の研究では、この評価シートの信頼性とその効果について検証した。まず、評価シートが評価者によって偏りのない結果となるか、その信頼性について実験をした。2種類の評価方法で分析を行なった結果、どちらの評価においても評価者間で有意な差が認められず、その信頼性を確認できた。そして、評価シートを使用したグループと使用しないグループに分けて実践指導を行なった結果、評価シートを事前配布したグループの方が点数の上昇幅が大きかった。このことから、この評価シートが指導者にとって有効な指導ツールとなることが確認できた。また、この評価シートの活用により客観的な自己評価が可能となり、学生にとってもガイド技能を向上させる自己学習ツールとなることが分かった。

報告者としての力量

自分自身の実践報告を通じて、語りの難しさを痛感した。60分の持ち時間であったが、実際は45分程度しか語るができなかった。ファシリテーターの先生

が、報告内容に関連した話題を提供してくださり、聴き手の先生方による報告内容を掘り下げる質問のお陰で時間まで討議することができた。明らかに、練習不足と経験不足による失敗であった。事前に何度か発表練習をしたが、本番では緊張して、準備していた話題に対し説明不足となり十分な情報提供ができなかった。

それに比べ、福井大学の院生は語りが上手いと感じた。発表された実践内容も素晴らしかったが、語りの技量にも感心させられた。聴き手に分かりやすく伝わるよう、資料の使い方や発表態度（アイコンタクトや声の質・大きさ）を工夫されていた。大阪教育大学では、長時間じっくりと自分自身の実践活動を語り省察するような機会はなかった。事例研究やインターンシップの発表は長くても30分程度で、修士論文は各自30分の内発表は10分間であった。グループ学習においても、ブレインストーミングやケースメソッドなどお互いに意見交換する討議であった。大阪教育大学が課題を探究し修士論文としてまとめ上げることに重点をおいているのに対して、福井大学の「語りと傾聴」による学びは新鮮であった。今回の経験を通じて、ラウンドテーブルの「語り」という学習スタイルに対応することが、私の新たな課題となった。



大阪教育大学大学院2回生 松山 康成

1. ラウンドテーブルの場

私自身、初めてのラウンドテーブルで発表した。参加する人の専門領域が異なることが、ラウンドテーブルの良さである。私たちのテーブルは、ファシリテーターを玉川大学石井恭子教授に務めていただいた。石井先生は小学校教諭の経験と現在の研究現場での知見を踏まえながら、発表者の研究的意義や重要性を整理しつつまとめていただき、私たち報告者を温かい表情で見守っていただいた。ここでは、このよき場での学びをまとめてみた。

2. 報告者① 冨田氏(福井大学附属支援学校)

冨田氏は、支援学校担任としてご活躍されており、今回の発表では大学内にある特別支援学校という特性を生かした取り組みを発表いただいた。このラウンドテーブルの良さは、一人の実践を100分という長い時間で、6名という少数のメンバーで聴きあうことができるということである。冨田氏は100分の発表の中で、子ども2人の事象について大きく時間を割いた。子に向き合う素晴らしさと、その語りの感情や気持ちを近い距離で感じることが私はできた。

冨田氏は、子どもの自己肯定感を高めるために、遊び活動を取り入れており、そこで作った古新聞のバックを、福井大学内にある生協にて配布する活動を行った。今回はそこでの子ども達の振る舞いやコミュニケーションの様子について語られた。冨田氏は現在、福井大学大学院にて特別支援教育におけるインクルーシブ教育を研究されている。理論的研究だけでなく、臨床的に子どもの姿を捉えている冨田先生の姿勢に、教員としての実践と研究を往還しつつ取り組むすばらしさを伺うことができた。このような語りを聞く機会は、学校現場でも感じるができないであろう貴重なものであった。

3. 報告者② 古市氏(東京大学大学院教育学研究科)

古市氏は佐藤学氏の学びの共同体を研究されている。今回の報告では広島県立安西高等学校(以下、安西高校)での学びの共同体の取り組みをご報告いただいた。報告では、校長先生を筆頭に理論に基づいた授業形態の導入と、それに対する教職員の反応や葛藤があり、学校現場に一斉に導入する難しさを物語っていた。

教科担任制の中学校において、校内授業研究が盛んに行われている事例は少ない。それは教科の違いから、授業について討議する視点が様々となり、どうしても討議会が深まらないという現状があった。

学びの共同体を通した授業研究では、討議会は子ども同士の学びを育てたかどうか、教師は的確に支援できたか、といったことが討議の中心となる。よって教科

による授業手法の違いによる障壁は取り除かれ、どの教科の教師も参加できる授業研究が可能となるのである。

古市氏は、学びの共同体に取り組む安西高校に1年間密着された。そこでは教職員の意思統一の難しさや、地域や保護者への働きかけやその重要性を感じられたという。このような話を聞くことで、学校教育における新たな取り組みを企てていく難しさを知ると同時に、改めてその重要性を感じた次第であった。

4. 広がりのあるラウンドテーブル

今回、福井でのラウンドテーブルであったが出席者は長崎から北海道と全国から参加されていた。私のテーブルは、私以外の5名が福井県出身であったが、東京大学の大学院生、玉川大学教授、また福井市内の公民館勤務の保護者の方、そして支援学校教員と本当に広い視野で話し合うことができた。私も自身の取り組みについて報告させていただいたが、テーブルの皆さんでの討議は、私が考えていたものを超えており、広い視点からご質問やご意見をいただき、これからの研究の大きな糧となった。

普段、学会や研究会へ参加することはあるが、その場では皆が同じ枠組みで研究し、その礎をもとに交流する。よって研究自体は深まるが、意外性は少ない。今回のラウンドテーブルは意外性に満ち溢れるものであった。この意外性を自分の中で活かせるよう、自分自身を高め、次の機会のテーブルにも参加したい。

スクールリーダー養成コース2年／福井県特別支援教育センター

船谷 友代

『浮かび上がった思いや考えを咀嚼し共有する2日間』

福井ラウンドテーブルでは、ポスターセッション、テーマごとのシンポジウムやフォーラム、そしてクロスセッションが行われる。ポスターセッションでは4本のポスター発表を、シンポジウムとフォーラムではそれぞれ2本の報告を聞くことができる。もうこの情報だけで、頭の中は、一旦、飽和状態になるのだが、ここで終わらないのがラウンドテーブルのすごいところで、醍醐味ともいえると思う。それぞれの報告の後には、報告者と参加者の間で必ずセッションがなされる。また、出席者全員が小グループでセッションを行う。報告者一人一人の発表の内容に、自分や他者の考えを重ねる作業を行うことで、報告のエッセンスがより鮮明に浮かび上がり、自分の考えもまた整理されていく。得た情報に、自分なりの思いや疑問をことばにして投げかけ、それに対

してまた新たな意見を得る。そのような、整理や意味づけのやりとりがなければ、せっかくの報告の内容は意外とあっさり頭の中の引き出しにしまいこまれてしまう気がする。



1日目に参加した『Zone A学校』のプログラムでは、教師のやりがいがある学校づくりについて、小学校、中学校、高等学校の実践報告を聞き、語り合った。

sessionⅡでは、子どもの学びと教師の学びの関係について特に考えさせられた。学校が抱える課題を解決するための学校改革や授業改善が、「子どものためになるかどうか」という明確なビジョンのもと展開された小学の報告。ここでは、子ども理解や授業の改善等、具体的な対応策が示された。管理職のリーダーシップのもと、理論に裏打ちされた指導方法等が示されたのであるが、この中で一番印象的だったのは、「子どもについて、よくなった・よかった具体的なエピソードを周囲の人に伝える。そのことから組織は変わっていく」ということばだった。子どもの姿に教師の姿が映し出され、その達成感が次の実践の動機づけになっているのだろうと想像できた。

sessionⅢでは、sessionⅡで生まれた問いや、新たな報告を受けて生まれた問いを、小グループで聞き合い、語り合った。「やりがい」ということばが、何人かの人の思考をとおして「教師自身の有用感」や「教師同士の認め合い」などということばに少しずつ置き換わっていく。それをとおして、自分の思考にも広がりが出てくるように感じた。

2日目は、異校種、異業種のグループでのクロスセッションが行われた。公民館主事、大学の学部生、現職の大学院生、小学校教諭と、多様なメンバーが、キャリアや立場をこえて意見を交換し、共有した。接点は一体どこにあるのだろうと、全員が不安でいっばいのスタートであったが、他者の実践の中には必ず自分の実践と共通の側面があった。また、自分もっていない、思いもつかないような視点での意見をいくつも受け取ることができた。一つ一つの細かな実践の上でのつながりだけでなく、家庭-学校-地域で子どものより豊かな育ちを支えるために…という大きなテーマを共有したチームというような一体感も味わった。

2日間をとおして、多様な報告や意見を聞いたり、自分の実践や考えを語ったりしたことで、新たなことばや表現を得たし、多様な視点をもつことができた。これらは、ただ目や耳から入ってきただけの情報とは違い、頭の中で咀嚼し、自分のことばに置き直して周囲に話して共有している。他者の実践に乗り移ったり、自分の実践に引きつけたりする思考をとおして、様々な実践がリアリティーをもって自分の中に存在している。これが学ぶということなのだと思う。今後いかに活かせるかというのが課題か、と思ったが、これはきっと、ひょっこりと思いがけない場面で活きるのではないかな。

教職専門性開発コース1年／啓新高等学校

藤井 真衣

6月21日(土)22日(日)に開催されたラウンドテーブルに参加しました。今回は初めての参加です。何が行われるのかイメージを持っておらず、初日の朝から運営の作業が待ち構えており慌ただしくスタートしたラウンドテーブル。まず驚いたのは県外からいらっしゃる先生方の多さです。北は北海道、南は沖縄から、先生方のプロフィールを拝見するたびに驚きがありました。また参加者は学校の先生方だけではありません。大学で教育関係の研究をしていらっしゃる方、教育委員会の方、公民館・児童館の方、他大学の大学生・留学生など、教育に関わるいろんな分野の方々が一堂に会す様子を、受け付け作業で目が回る中で目の当たりにしました。驚くと同時になぜこんなに幅広い分野の方々が大勢このラウンドテーブルに参加されるのだろうかと思惑にも思いました。この疑問は、二日間を経験した今少し答えが見えてきた気がしています。

初めてのラウンドテーブルは目から鱗が落ちるばかりでした。さてここからは目から鱗が落ちたすべての行程のうち特に心に残ったものを報告させていただきます。まずは1日目sessionⅠのポスターセッションです。私は埼玉県立新座高等学校のポスター発表を拝見しました。

発表を行っていたのは新採2年目と3年目の若手の先生方でした。発表を聞いて、発表者のお二人が学校文化の中に入っていることを肌で感じました。年が近い先生方なのでつい自分と重ねながら発表を拝聴しました。教員免許を取得済みなので私も本来ならば一教員として毎日学校に行き教壇に立っているところです。私は採用後学校文化の中に入りこめるのだろうか、また今のインターン先の学校文化に入り込む努力をしているだろう



か、胸に刺さる問いが自分に投げかけられた発表でした。

次に一日目sessionⅢのグループ討議です。福井市立本郷小学校の北先生と埼玉県立新座高等学校の金子先生の報告の後の討議では、人を育てることや組織を育てることについて話し合いました。少し前に大学院の週間カンファレンスで「自分の持つ能力以上の能力を育てることは可能か」について考えたところだったので、今回の討議が先日の話し合いとリンクしてとても興味深く、肩に力を入れずに参加することができました。ミドルリーダーの先生方がお話しする学校改革・若手育成のための組織づくりにおける苦労は、将来勤務する学校の様子を映像化してくださっているようでした。ミドルリーダーの方々の視点をお聞きすることで、新採用としての視点だけでなく学校をつくるあらゆる方々の視点から物事を見ることができそうな気がしました。

二日目は終日グループセッションでした。東京都板橋区立赤塚第二中学校の岡部先生の進行のもと、福井県特別支援教育センター指導主事の源甲斐先生・越前市岡本公民館の笹原さん・宮崎県立宮崎大宮高等学校の山崎先生の報告を拝聴しました。毎月の合同カンファレンスでは学校の先生と主に話をさせていただくので、公民館のお話は特に新鮮でした。また私と同じ聞き手の役割をしていらっしゃる山口東京理科大学畑中先生の、教員養成課程指導教員としてのご意見もとても新鮮でした。報告やそれに基づく話し合いが進む中で、どの立場の方も人を動かしたり人を動かす支援をしたりする役割を担っていらっしゃるが見えてきました。人を動かすことは大変なエネルギーが必要です。相手のリズムがな

かなか掴めず悶々としたり、自分の感情に整理がつかずに悩んだりと常に日進月歩の状態の中で活動されているのだとお話を聞いていて感じました。教育の分野は、今私が関わっている世界が全てではないのだと改めて実感することとなりました。また岡部先生・源甲斐先生・山崎先生がミドルリーダーとして考えていらっしゃる「現場を若手に譲って自分は上に立たねばならない時期・立場になりつつあるが、でもやはり現場で働きたい」という悩みは、新たな気付きを与えてくれました。それは、若手は指導力を持ったベテランの先生方から現場の立場を譲り受けているのだということです。当たり前と言えば当たり前なのですが、目の前のことに目が行き過ぎて見失っていた視点でした。二日目を終えて、若手として「協働」するということは、その学校の文化に入り込み思想やノウハウを受け継ぐという面もあるのだと考えるようになりました。

このようにして終えたラウンドテーブルの二日間、お話をさせていただいた先生方の多くは「ここに来ると色々な意見が聞ける。新しい視点が得られる。だから忙しくてもまたここに来ようと思うのだ」とおっしゃっていました。新しい視点、それは右も左も分からないながらに私がこの二日で得られたことでした。日々のやるべきことに流されてしまいそうなときにラウンドテーブルに参加し、気持ちを新たに広い視野でもって教育に従事する、それがラウンドテーブルの力なのだと思います。参加者の中には福井大学教職大学院の修了生の方も多くいらっしゃっていました。私も修了後、引き続きラウンドテーブルに戻ってきたいと心から思えるよう、次回以降のラウンドテーブルを一回一回大切にしようと思います。

教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属中学校

棟田 章裕

「問い」の奥深さ

6月21日22日、私にとって3回目となる福井ラウンドテーブルに参加しました。突然ではありますが、私は参加後に毎回感じるがあります。それは院生という立場ですが、「明日からまた頑張ろう」という気持ちです。なぜこのような気持ちになるのだろうかと考えてみますと、私は職種、校種、役職、年齢が異なる方々と、一つのテーブルを囲いながら、報告を聴き合い、悩み、考え、語り合うことから生まれているのではないかと思います。そして限られた時間の中で、こうした機会がなければ会えない方々と共に空間をつくりあげること、これまでに見えなかった視点や考えを知り、次に挑戦しようとする力が生まれるのではと思います。

ラウンドテーブル1日目はZone D「授業」に参加しました。今回のZone Dでは、2014年3月に「問い

はどこから生まれるのか？」について対話することで深まり生まれた「子どもたちに質の高い学びを生む問いとは？」「質の高い学びとは？」という新たな問いに関して、報告者の方々の発表を手がかりに小グループ、全体で考えを深めていきました。私は先生方のお話を聞く中で疑問や問いが生まれ、さらに語り合うことで新たに自分の中に問いが生まれていきました。「問いを発するのは子ども？それとも教師？」「授業名人の問いは子どもに寄り添ったものになっているが、質の高い授業って？」「そもそも問いの質や学びの質とは？」「学びの質は学ぶ楽しさを気付くことができるようなもの？子どもたち自身が価値を見いだすことができるもの？教師は何ができるのか？」など子どもや教師、教科など様々な視点から質の高い学びを生む問いについて迫っていったように思います。そして様々なお話の中で、特別支援学校の先生が「その子の将来のためになることをいつも考

えている」という言葉がありました。私はこの言葉を聞いて、私はどうだろうと改めて考えることができました。そして、一人一人の子どもを理解することから、より良い問いが生まれるきっかけになるのではと感じました。

最後に、今回Zone Dで学ばせていただいた質の高い学びを生む問いやその授業についてまだモヤモヤとして

いる私ですが、今回いただいた授業や問いを考える視点についてこれから問い続けながら学んでいきたいと思いません。院生として最後になる4回目の福井ラウンドテーブルでは、前回と今回の続きとなるZone Dに参加して、さらに考えを深めさせていただきたいと思いません。

福井大学教育地域科学部附属幼稚園

平成26年度公開保育に参加して



教育の原点としての「学びの芽生え」を考える

福井大学教職大学院 准教授 岸野 麻衣

平成26年7月5日(土)、福井大学教職大学院の拠点校の一つでもある、福井大学教育地域科学部附属幼稚園において公開保育が行われ、県内外から200名を超える幼児教育関係者が集いました。附属幼稚園では、2年周期で研究を進めており、例年、1年次は6月頃に公開保育を行い、2年次は10月頃に研究集会を行っています。今年度は、新たな研究主題「学びの芽生えを育む～自分から遊びたくなる環境づくり～」の1年次です。午前中、保育が公開され、全体会で研究概要が報告されたあと、午後は学年別にグループ協議を行い、長年附属幼稚園の全体指導助言をいただいている無藤隆先生(白梅学園大学)から「学びの芽生えを育む保育と環境」と題した講演が行われました。

附属幼稚園では、「学びの芽生え」を「遊びの対象や友達に興味をもち、自分から遊ぼうとする思いをもつこと。心身全体を通して思う存分遊び、さまざまな気づきを得ること」として、これらを育むための援助について、特に環境づくりに焦点を当てて、事例研究を進めつつあります。

当日、私は5歳児クラスの指導助言を担当しており、主に5歳児の遊ぶ様子を参観しました。牛乳パックで2つのレーンを作ったテーブルを、斜めに傾けて滑り台が作られ、その先には水をためたミニプールが置いてありました。子どもたちは、牛乳パックで水を汲んで滑り台の上から流しながら、いろいろなものを滑らせていきます。牛乳パックやトレイ、カップなどで思い思いに作った船を滑らせて競争したり、水の入ったペットボトルを滑らせてドボンとプールに落ちるのを楽しんだり、少し重いジョーロを滑らせようと二人がかりで牛乳パッ

クに水を汲んで流したり。水の滑り台に対して、子どもが自分なりの関心で遊び、時に力を合わせて、物の特性について無自覚ながらもさまざまな気づきを得ていたことがうかがわれました。

もう一つの部屋では、2つのコーンの間にフラフープを挟んで付けた輪に向けて、紙皿で作ったUFOを投げ入れる遊びが展開していました。子どもたちは、手首、腕、腰、足と全身を工夫して使って投げ、紙皿UFOが輪をくぐって遠くに飛んだりカゴに入ったりするのを楽しんでいました。ここでも、対象に自分から向かっていき、自分なりに投げ方や楽しみ方を工夫して、身体的な気づきを得ていたことがうかがえます。「みんなの時間」として設定されている、一日の遊びの振り返りと共有をする時間には、実際にそれを披露する場面もあり、子どもが遊びの手応えを確かめると同時に、まだまだやっていない子どもにも広げる機会になっていました。小学校以降、子どもは、「授業」というある種の枠の中で、設定された課題の解決に向けて、自分の頭で考え、判断し、表現することを通して、学んだことを自覚していくことを求められます。さまざまなものに興味を持ち、自分なりに関わっていく幼児期の経験は、この課題解決に向かう学びの姿勢につながります。また、幼児期に無自覚ながらも



体験として身体で得た気づきは、学んだことを自覚化していく際、それをより確かなものにしてくれます。「自分から」興味を持ち、関わっていき、気づきを得ていくことを大事にするため、幼児教育では「環境構成」が重要になってきます。教師が「これをこうやってしましよう」とすべて指導するのではなく、子どもたちが自分から興味を持って気づきを得ていけるように、物や人、場や状況の設定をさまざまに工夫します。今回の保育でも、

そうした工夫が随所に見られました。学びの芽生えを育む幼児期の教育は、教育の原点でもあります。来年度の秋の研究集会に向けて、附属幼稚園の先生方が日々の保育と事例研究を充実させていくことを願うと共に、教職大学院に関わるみなさんにも是非ご参加いただき、学びについて一緒に考えていけたらと思います。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース2年／啓新高等学校

船木 知憲

6月の週間カンファレンス（以下木曜カンファレンス）における学びを紹介していきたい。木曜カンファレンスでは主に、午前（1.今週の学びの振り返り 2.主担当企画）、午後（3.公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習 4.授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究）という四つの学びを行う。

まず、今週の学びの振り返りでは、3～4人の小グループで授業実践での悩みや学校で抱えている課題意識など、校種・教科の枠組みを超えて話し合いを行った。様々な意見や考えが得られ、視野の広がりを感じられる有意義な時間である。

次に、主担当企画である。これは、毎月インターン校ごとに担当が割り振られ、それぞれがテーマを決めて1ヶ月の学習を進めていく。今月の主担当は啓新高校のインターン生4人（宮川、田村朋、藤井、私。以下啓新チームと呼ぶ）だった。私たちはテーマを「Process to the Next Stage」に決定した。そのねらいは、木曜カンファレンスにおける話し合いをよりよいものにしていくことだった。現状の木曜カンファレンスは話し合いが停滞してしまうことや、話し合いが深まらずただ報告しあうだけになってしまうことがあるという課題点があった。その現状を改善していくためにはどうしたらよいか1週目はグループごとに問題点を見つけ、全体にそれを共有。2週目はその問題点をもとに個人ごとに参加の仕方を考え、一人ひとり目標を掲げた。3週目は富永先生にワークショップを開いてもらい、話し合いをよりよくしていくためにどうしたらよいかをグループの枠組みを超えて院生全体で考えを深めていった。4週目は、3週目までの内容を踏まえて考えたこと、これからの展望を語り合い、意見交流を行った。

この4回の主担当企画は、啓新チームで毎回のカンファレンスが終わるたびに「次はこうした方がよいのでは、もっとこうすべきでは。」と、意見を練り合い作り上げたものだった。6月は主担当企画以外にも授業実践やラウンドテーブルの報告、教員採用試験の願書提出、インターン報告書の締切りなど様々なことが同時にあり、教職大学院の1年の中でも特に多忙な月だったのだが、そういった中で回を重ねるごとに院生達のカンファレンスに対する意識に変化が見られ、とても大きな達成感や喜びを得られた。

私個人としてはチームでひとつのことをやり遂げるということの素晴らしさを教職大学院に来て最も感じることでできた1ヶ月だった。これは学校現場における教員間の連携や授業のグループ学習でもおそらく通じることで、チームが共通理解を持って全力で目標を達成した際のやりがいや喜びは大きいように思う。今回の学びをきっかけにしてチームで学習することの大切さを広げることができればいいと考えた。

午後の公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習では、教師の力量形成に関してそれぞれが用意してきた資料や中央教育審議会から出されている資料をもとに、グループでの語り合いや自分の意見をまとめる機会が設けられた。院生それぞれが興味をもつ資料や最新の動向がわかる資料を検討し、考えを深め合う中で理解が深まった。多少なり難しいと思えるような資料であってもグループ内で話すことを目的として読むことにより、主体的に考えることができたように思う。内容に関して例えば、中央教育審議会の教師の力量形成に関する資料を改正前と後とで比較した際に、カタカナが多いという第一印象を受けた。その理由としては新しい定義付けをす

る際に、既存の言葉ではうまく伝えられないものをカタカナの文字を使うのだから、カタカナを使ってある部分は注意を払っていく必要があるということがわかった。また、改正前は超人のような完璧な教師像を求めている一方で、改正後は「学び続ける」という言葉から完璧ではないことを前提にしていることが大きな違いだとわかった。

次の授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究では、教科書分析を通して考えたことをまとめ、教科・校種の枠組みを超えて話し合った。私の場合だと、はじめに高校の地歴・公民の教科書を読む中で、教科書のねらいや育みたい力を考えていった。さらに、高校の

枠組みに囚われることなく小学校や中学校の社会。さらには小学校の生活科まで掘り下げていった。12年間の長期的な視点で教科書を見つめ直すことで、1単元や1時間という短期的な視点に対する価値の意味付けが深まるきっかけになった。

最後に、私自身がこのように1ヶ月の木曜カンファレンスを振り返ることで、木曜カンファレンスの意義を再々度捉え直す機会ができた。この機会にニュースレターを書かせてもらえたことに感謝したい。

教職専門性開発コース1年／中藤小学校 高橋 聡志

視点の移り変わり

4月にインターンシップが始まって、早くも3ヶ月が経とうとしている。学校にもようやく慣れ、子どもとかかわること以外にも、教員の仕事を生で体験させていただいている。

また、6月からは私自身の授業実践も始まり、試行錯誤が続いている毎日である。

この1学期では自分なりにテーマを決めて臨んだ。そのテーマとは「子どもをみとる。」ことである。4月にインターンが始まる時には、不安でいっぱいであった。その不安は子どもたちのことを全く知らなかったためである。そのため、まずは子どもを知ろうということで、「子どもをみとる。」ことをテーマに掲げ、取り組んだ。私が子どもたちを知るために行ったのは「カルテ」をとることである。子どもをみとるツールとして「カルテ」を学部時代に知った。その方法で子どもたちを見てみようと思った。まず、座席表をつくり、子どもたちの性格、特徴、得手不得手などを私の主観で記入していく。日々の学校生活でのありのままを記していく。そして1ヶ月が経った後、振り返り、「このみとりは間違っていたのではないか。」などと改めて捉え直す。その後、新しい座席表を作り、また新たに記入していく。そうして今、手元には3ヶ月分の3枚の座席表がある。その3枚は書きっぱなしにするのではなく、つなげて見てみる。そうすると、私の子どもを見る視点が変わってきていることに気づいた。

はじめの1ヶ月は子どもたちを知ることに必死で、日々のメモや座席表にも子どもたちのかかわりばかりが書かれている。またクラスには通級指導が必要な児童もおり、その児童をどう支えていくかということにも触れている。しかし、その1ヶ月後には、新しい環境に慣れた子どもたちがトラブルを起こしたり、喧嘩をしたりす

る場面が増えたため、「この子にはこのような指導がいいのではないだろうか。」と考える時間が多くなった。そのため、生徒指導の面にも焦点を当てて子どもをみとった。さらにその1ヶ月後には私の授業実践が始まった。教材研究を進めていく中で、「どうしたら課題を解決できるだろう。」「このつまずきはしたら解消できるだろう。」というように、子どもたちの学びについて考えることが多くなった。そのため、ほかの先生方の授業を見る視点も、子どもたちどうしのかかわりに加え、個人の学力を見て今後の授業に生かしていきたいと考えた。6月の座席表には個々のつまずきや「授業を通してこうなって欲しい」といった私の願いなどが書かれている。

振り返ると、私の中で上記のような視点の移り変わりが起きている。このように視点が変わっているのも、長期インターンシップで長い目で子どもたちを見ることができているためだと考える。

また、学校で起きていることや私自身が感じたことを話すことのできる週間カンファレンスの存在も大きい。私の経験から新たな視点を導き出してくださる他の院生や先生方からの助言をもとに、また新たな展開を生み出すことができる。

今後も子どもの実態に合わせて視点が変わっていくと思うが、全てを関連付けて捉えることができるようにしていきたい。



Staff 紹介



荒瀬 克己

Katsumi Arase

国語科教員をしていた18年間は、授業時間割によって日常生活が決定していました。指導主事になり、手帳なしには自分の予定がわからない生活を経験することになりました。管理職を

務めた14年間は、京都市立堀川高校の再出発に関わりました。その間に50歳となり、「『天命を知る』らしい年になりました」と年賀状に書きました。しかし、何がそうなのかはよくわかりませんでした。京都市教育委員会教育企画監の2年間は、議会や庁内の会議や庁外の会合や視察や、多くの打ち合わせで日程が決められていました。そして今年の4月からは、大谷大学で学生相手に日々を重ねています。

文学科に所属していることから、「ご専門は」、「授業では何を」と尋ねられることが多くて困っています。特に研究していたこともなく、また、何ができるというわけでもないの、「言語技術に関心があります」とか、「いま小さな博物館をフィールドとしてPBLをやっています」とかと、答えにならない返答でお茶を濁しています。

それはともかく厳しくも楽しい時間を送っているのですが、基本的に自分一人でもしななければならない

という状態にまだ慣れず、多方面にご迷惑をおかけする毎日です。今更ながら、いかにたくさんの方々を支えられてきたかということを思います。

「恩送り」というものがあります。井上ひさしの言葉だと記憶していますが、定かではありません。「恩返し」はご厚意をくださったその人に直接お返しする。しかしそれができない場合、受けた恩を自分のところで留めてしまわないで、どなたかに送る。預かりものだと考えて送る。かたちはそのままでないかも知れないが送る。未熟でいい加減なわたしは、その分多くを預かってきましたから、送るものもきっと多いはずだと思っています。

いろいろな場面であれこれと話をしてきました。拙い文章も書いてきました。ご依頼いただけることに感謝しています。アタリマエのことしか言えないし書けないのですが、そういうアタリマエが少なくなっているのか、あるいは喜んでくださっていると単に勘違いしているのか、そのあたりはよくわかりません。ともあれ、おかげで多くの方にお会いし、さまざまな勉強をする機会を得ました。わたしにとっては、たいせつな財産です。

ならば、心してそれらを送ることが天命なのかもしれません。



鈴木 寛

Hiroshi Suzuki

本年度、客員教授に就任いたしました鈴木寛です。どうぞよろしくお願ひします。

福井大学は、教員養成のレベルアップに力を入れているモデルとして私が文科副大臣在職中

に視察させていただいたとき以来、福井大学の松木教授はじめ協力をいただいて、教員養成のあり方を検討してきました。また、通産省時代25年前から、エネルギー政策・眼鏡産業・伝統工芸品産業の振興などの仕事で何度となく福井を訪問しており、強いご縁を感じております。

私は、1999年、霞が関を脱藩し、慶應義塾大学助教授に。2001年より、参議院議員2期（東京都選出）。一貫して文部科学政策に従事し、とりわけ、2009年より文部科学副大臣を2期2年務めました。この間、高校無償化法制定、大学生希望者全員奨学金、大学授業免除者枠倍増を実現いたしました。コンクリートから人へ予算配分構造改革を実現し、初めて、文部科学省予算が国土交通予算を上回る。そして、学校教育力向上に資する教員の質の向上と数の充実に尽力し、教員定数純増に踏み切り、さらに、小1小2の35人学級を実現しました。教員の質向上の観点からは、先に述べたように福井大学教職大学院での実践と成果に触発され、教育実習の

充実を柱とした教育養成のあり方抜本的見直しを提起し、文部科学省において、福井大学松本教授を中核メンバーとして、教育関係者と初中等教育局と高等教育局一体となった検討に着手、さらに発達障害に関する研究と教育に関する大学の拠点を充実してまいりました。

現在は、国立大学・私立大学同時教授就任の日本初のケースとして、東京大学公共政策大学院教授、慶應義塾大学政策・メディア研究科教授（クロスアポイントメント）、日本サッカー協会理事などを務めております。

アカデミックの世界に戻ったわけですが、日本の教育現場をつくり直していくためにまず着手しなければな

らないのは、教員をつくり直すことだと私は信じています。ポストモダン社会を構築するための人材の育成に携わることのできる教師を輩出することを明確に意識し、教職大学院は、新たな時代にふさわしい新たな教育法の研究・開発・実践を普及することが望まれます。

福井大学の教員・職員・学生のみなさんと一緒に開発しながら、社会を巻き込んだ大学院にしていければと考えております。どうぞよろしくお願ひします。

院 生 紹 介



山口 有一 やまぐち ゆういち (美浜中学校)

今年度、教職大学院に入学しました山口有一です。私は、大学卒業後1年間県立高校での常勤講師を経て採用となり、自身の母校である美浜中学校に新採用として着

任しました。当時の先輩教員から教科指導や生徒指導、特別活動や生徒会活動のことなど多くのことを教わりました。当時の美浜中学校には職員室の隣にスタジオと呼ばれる部屋があり、空き時間や放課後にそこに集まってよく話をしていたことを思い出します。そんな美浜中学校で最初の8年間を過ごしました。

その後、美浜町の教育委員会で派遣スポーツ主事として2年間勤務しました。大学卒業後すぐに空手道の指導に携わり、仲間とともにスポーツ少年団を立ち上げて活動していたこともあり、美浜町のスポーツ行政に深く関わることができました。今も続いている美浜五木ひろしまラソンも担当したことがあります。また、美浜町のスポーツ推進委員（当時：体育指導員）という組織の事務局も担当しました。ニュースポーツの普及や軽スポーツの振興、総合体育館の利用促進についてメンバーの方々と活動させていただきました。今も美浜町のスポーツ推進委員の一人として微力ながら一緒に活動させてもらっています。このように、スポーツを通じて異年齢の活発な方々と知り合うことができました。

その後、福井県教育庁嶺南教育事務所研修課で研究員を務めました。そこでは、「資質能力の向上を図る教員研修の在り方—教員どうしの学び合いの場となる校内研修を通して—」という研究主題をもって2年間務めました。

その後、再度美浜中学校へ転任しました。研究員で学

んだことを実践できればよかったです。今振り返ると、日々自分のことで精一杯で、何も還元できなかったのではないかと、申し訳なく思っています。2年続けて3学年の学級担任をさせていただき、自身の経験の中ではとても充実した楽しい2年間でした。

そんな学校現場を去り、今度は美浜町教育委員会へ派遣社会教育主事として務めることになりました。そこで3年間、美浜町の人権教育を担当しました。美浜町人権啓発協議会の事務局を務め、人権に関する講座やイベントを企画したり、啓発冊子や人権だよりを編集したりしました。また、地元企業で一般の方を相手にお話をさせていただく機会も多くありました。人とのつながりが広がり、自分自身の人権感覚を振り返ることも多くあり、人として成長させていただいた3年間でした。

その後、再度美浜中学校に転任し、今年で3年目になります。そして、今年度、教職大学院で学ばせていただく機会を得ることができました。学校現場は美浜中学校でしか勤務経験のない私にとっては、他校の取り組みや様子を知ることができるよい機会になると思っています。また、行政勤務時に得た地域の方々とつながりや地域の一人としての強みを生かしていく視点なども学んでいけたらいいなと思っています。

本校は、有り難いことにこれまで拠点校として取り組んできた経緯があり、研究体制は整っています。自分ができることは、これまで通りの研究を実践し、振り返って、課題を見つけ、改善を加えていくことを繰り返して行っていくことだと思っています。どれだけの実践ができるかは分かりませんが、美浜中学校に少しでも還元していけるようにしていきたいと考えています。



山田 啓子 やまだ けいこ (野向小学校)

今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました山田啓子です。教員生活は23年目になりますが、その内訳には、私立「きのくに子どもの村小学校」(和歌山県)と、同法人の「かつやま子どもの村小・中学校」(福井県)の教諭時代があります。私は福井県あわら市の生まれで、三国の海の魚介類を食べて育ち日本海を愛する一人です。その私が勤務した上記の私立学校はどちらも市外から離れた山の自然の中にあり、最初はその山の魅力に気づくことが出来ず、故郷の海を懐かしんだものでした。しかしいつの頃か、山の緑やその静けさ、空気の美味しさを愛するようになっていきました。その後「子どもの村小学校」を退職し、やはり山並みの美しい勝山市の公立小学校で通級指導をしています。今年はその7年目で、この6年間で勝山市の小・中学校12校のうち兼務校も含め10校に勤務しました。そして、公立学校の教育熱心な先生方の影響を受け、通級指導に「やりがい」を感じるようになりました。

最近このようなことがありました。通級指導児童A児の国語「お話の作者になろう」という単元のことで、A児の国語の通級指導時間は週2時間ですが、担任

の先生が次のように計画を立てて進めてくださいました。「構成を考える(通級)」→「挿絵を描く(学級)」→「下書きをする(通級)」→「表紙と裏表紙を描く(学級)」→「下書きの続きをする(通級)」→「清書する(学級)」→「清書の仕上げをする(通級)」→「友達の本を読み感想を書く(学級)」というように、通級の個別指導時間を活かし、A児が学級でも無理なく楽しく活動できる配慮でした。通級指導教室でお話を書き終え学級に戻り、担任の先生に表紙と清書した紙をホッチキスでとめてもらった瞬間のA児の嬉しそうな表情が印象的でした。隣の席の子がA児の本が出来上がるのを待っていて、A児が「完成!」と叫ぶとさっそく「読ませて」と寄ってきました。その様子から担任の先生が、A児が通級指導後も学級に戻りやすいように心配りをしてくださっていることを知りとても嬉しく思いました。

このような微力ながらも、担任の先生との二人三脚で得られる通級指導児童の笑顔が「やりがい」となっている毎日ですが、これまで限られた発想、視野で行動してきたように思います。この2年間はたくさんの方々のお話を聞き、広い視野で思考できるようになりたいと思います。どうぞよろしくお祈りします。



吉川 長利 よしかわ ながとし (勝山高等学校)

今年度から、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました吉川長利です。勝山高校に勤務しています。

担当教科は英語で、これまで生徒たちが卒業後も英語を通して、世界の人々と交流をしたり文化に触れたりしながら、豊かで充実した人生を送れることを胸に、授業を行ってきました。うれしいことに、SNSの普及により遠く離れた海外の地にも近況のやりとりができるようになったため、何人もの卒業生が留学先や旅行先から、外国人の友人と撮った写真とともに楽しい時間を過ごしている様子を知らせてくれています。自分自身がこれまで外国で味わった、片側5車線もあるハイウェイを走ったり、広大なキャンパスの中でいろいろな国から来ている学生と一緒に授業を受けたり、週末にホストファミリーとキャンプに出かけたりというような、日本では味わえないわくわくする体験を、これからも自分の生徒たちにもさせてあげたいとの思いを持っています。

さて、これまでもあらゆる機会で行われてきたコミュニケーションを中心とした英語教育改革の流れが、今年にかけてますます強まっています。文科省はグローバル人材育成推進事業やスーパーグローバルハイスクール事

業を打ち出すなど新しい取り組みが始まっています。そして私の勤務している勝山市では、勝山中部中学校の校区の小学校、中学校、高校を対象に英語教育強化地域拠点事業が始まりました。この事業によって勝山市の小学校では3、4年生で外国語活動が始まり、5、6年生では教科としての英語の授業が行われています。そして地区の小中高校が一緒になって事業に取り組むため、相互に授業参観をしたり、月一度の会議を開いて意見を交換したりといった取り組みが始まっています。小学校や中学校の先生方と一緒に会議をすることは経験のなかったことであり、教科会を中心とした高校との教師集団の違いが感じられます。拠点事業はようやく動き出した段階であり、今後いかに小中高連携を築いていくのかまた生徒により豊かな英語の力を身につけさせるための指導法など高校側の課題も多いです。

教職大学院では、月1度のカンファレンスの場で、拠点事業と同様にこれまでにない幅広い先生方と意見交換をするようになり、自分の世界がどんどん広がっていることを実感しています。教職大学院では協働という言葉がキーワードとしてしばしば使われますが、自分の学校の英語科教科会という組織を見たとき、この言葉がよく当てはまっていると感じます。それぞれの個人に主体的に仕事を分担しようという意識があり、とてもよい現状

だと思えます。しかし、それ以上にこれまで自分の知らなかった過去の実践や他の地域での取り組みに接することができるのが教職大学院での特色です。実践報告書を読み進めたり、一緒にテーブルを囲んだ先生方の悩みや体験談に自分を重ね合わせることで、自分だったらどうするだろうかと考えを深めることができます。また、ファシリテーター役のスタッフの先生は参加者の思いを

上手く引き出し、それに対して多様な視点のとらえ方を示してくれます。先日参加したランドテーブルでは2日間にわたり、他県を含む多くの方々から大変密度の濃いお話を聞きすることができました。今後夏の集中講義をけるとまた新たな視点が見つかるかもしれません。そして、教職大学院での学びが深まると拠点事業での取り組みも併せて充実していくのではないかと考えています。



山田 俊行

やまだ としゆき (春江小学校)

「問いに答えます。こいつは何者なのか。」

コーディネーター富永先生の大胆な切り出しで始まった6月ラウンドテーブル Zone D「授業」。そんなラウンドテーブル終了後に、

この原稿を書いています。

問いに答えます。今年度よりスクールリーダー養成コースに入学しました山田俊行です。新採用で嶺南に4年間、その後21年間を丸岡町で勤務し、昨年度より坂井市立春江小学校に勤務しております。丸岡町は自分の生まれ育った町ということもあり、地域には知り合いも多く、先生方はもちろん、保護者や地域の方など多くの方々を支えられながら教育活動を行ってきました。専門教科が体育ということもあり、校内では体育主任を任されることが多く、児童全体を動かす機会にも恵まれ、生徒指導に関する校務が中心でした。教育委員会にも派遣され、地域の人たちのネットワークも広がりました。そして知らず知らずのうちに、間違っただけで自信を失ってしまっていました。

そんな私にとって昨年度の異動は大きな転機でした。これまでの経験が通用しないことを痛感させられたからです。同じ坂井市内でもこれほど違うのだということ、この年齢になって思い知らされました。早く慣れな

ければという焦り、思うように通用しない指示、空回りの虚しさ、悪戦苦闘の毎日の中で、校長先生から大学院入学を勧められました。

ここ10年余り、私は愚息のサッカー応援を楽しみにしてまいりました。平日は学校の仕事を一生懸命こなし、土日はサッカー応援でストレス発散。小・中・高校、全校種でサッカー部父母会の会長を務め、全校種での県大会優勝、全国大会出場の応援・お世話をしてきました。そんなサッカー応援も昨年度で終了。校長先生からの紹介も何かの運、教員人生を変えるタイミングと思い、高校サッカー選手権の終わった愚息と一緒に受験勉強をしました。

入学してはや3ヶ月。2回のカンファレンスと1回のラウンドを経験して、いろいろな先生方と交流することの心地よさを感じています。正直なところ、研究については、何をどのように進めていけばいいのか未定な状態です。現在は指定を受けた道徳教育の研究推進で手一杯です。けれどもあわてずにじっくりと、間違っただけで自信を見つめ直し、「子どもにとっても教師にとっても楽しい学校づくり」を進めていきたいと考えています。そして2年後に、「自分は大学院でこれを身に付けた」と言える学びが展開できればいいなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



柳 博恵

やなぎ ひろえ (附属中学校)

今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました柳博恵(やなぎひろえ)と申します。現在、福井大学教育地域科学部附属中学校に勤務しております。

教科は音楽で、1年生の担任、合唱部の顧問を担当しています。

これまで、2～3年計画の研究が指定された学校に赴任することが多く、新採用の大飯中学校では学力向上の研究発表、北郷小学校では算数・数学の教科の授業研究、至民中学校では道徳教育の研究発表、明道中学校では学力向上フロンティア事業フロンティアスクール研究に取り組み、実践発表を行ってきました。いずれも教員

が一丸となって目の前にいる子どもたちの実態をつかみ、テーマに沿った活動や授業を考え、取り組んできたことが今の私の大きな財産となっています。振り返ってみると、当時は気付いていなかったけれど、「教師の協働」を自然と実践していたように思います。それぞれの研究テーマから音楽の授業を組み立てる大変さはありませんでしたが終わってみるといい機会を与えてもらったことに感謝しています。

特に教科指導において、転機となったのは、全日本音楽研究会福井県大会での授業と翌年の本部大会で実践報告の機会を頂いたことです。ここでは、音楽科の教員として、新学習指導要領にもとづいて教科としてどんな力をつけたいか、何を学んでいくか、そしてどのように授

業を展開すると良いか教材研究に必死に取り組みました。個人研究というより、福井市中学校音楽科教員の協働研究が支えとなって全国に提案・発信することができました。私は、教科の授業はもちろん、学校行事や地域の行事へ参加することなどを通して、音楽の楽しさや仲間と共に表現を創り上げるすばらしさを子どもたちに実感させたいという思いをずっと大切にしています。

今年、私は附属中学校5年目となりました。(附属中学校の研究主題や探究活動についてはNewsletter No.64のP16を参照ください。)

異動で教員の入れ替えがあっても脈々と受け継がれていく研究体制を紐解いていき、私が歩む道を価値づけす

る良い機会となるよう学んでいきたいと考えています。教師の「協働研究」に視点をおき、長く受け継がれてきた研究の仕組みを解明していきたいです。附属中に在籍してから「教師が何を教えたいか」から「何を生徒と共に探究したいか」へと自分の考え方に変容が見られるようになりました。まだまだ、勉強不足ですが、これからの未来を生きていく子どもたちのために教師としてできることは何かを探りながら、自分自身の学びを広げ、深めていきたいと考えております。学び続ける教師でありたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



星野 聡徳 ほしの あきのり (板橋区立中台中学校)

こんにちは、スクールリーダー養成コースに入学しました星野聡徳と申します。教員になり7年目になります。現在の勤務校である中台中学校は2校目になります。大学1年生のとき

から高校の数学教育と物理教育を学んできました。大学1年から大学院修士2年まで塾講師として過ごし、いかに高校生に数学と物理を理解させるかの技術向上に猛進してきました。東京都の公立学校に就職したらその経験を生かし、物理を教えようと考えていましたが、中学校に配属になりました。しかし、中学の理科も広い範囲に触れることができ、楽しいと感じるようになりました。今では中学校の理科で良かったと思っています。部活動はソフトテニス部の顧問になりました。元々は硬式テニスの経験があるのですが、ソフトテニスは初めてでした。今では大会で上位進出を目標に部活動指導に取り組んでいます。

さて、学校とは、授業・行事・部活動・特別活動など様々な教育活動などで児童・生徒を育てていく所です。特に授業における教科教育はその中心になると思います。私たちは教育のプロですから、授業が上手でなくてはなりません。常に指導技術を磨き、教科の専門性を高めていく必要があります。それは一人ではできず、職場

の同僚や研究会の先生など多くの教員で情報を交換し、お互い授業を見て高め合うことが必要です。校内研究がその役割として機能する最少単位である必要があると思います。

中台中学校は、平成28年度から新校舎になり、全教室に電子黒板が導入されICT機器の活用が推進されるとともに、教科センター方式となり教科教育の専門性も高めていかなければなりません。そのためには教員の“協働”，生徒の“見取り”，日頃の教育活動の“省察”が不可欠です。それを円滑に進めるために、私は福井大学の教職大学院に入学しました。福井大学の教職大学院は全てが先進的です。先生の講義を聞くという従来の授業ではなく、院生同士が省察し報告し、それを傾聴するという流れの中で自分の実践を評価し、これからの未来が見えてきます。合同カンファレンスは大変刺激になりました。そして、教職大学院のスタッフの先生方の考え方や実践もまた先進的です。教師が自分の教科を好きでないと楽しさが生徒に伝わらないのと同じように、教職大学院の先生方がいろいろなことを楽しみながらお仕事をされているからこそ、私たち院生も大学院での学びを楽しく学べます。校内研究も教職大学院での学びもまだ始まったばかりです。生徒の学びがより充実すると信じて、2年間楽しみながら学んでいきたいと思



平林 茂将 ひらばやし しげまさ (鹿谷小学校)

みなさん、こんにちは。スクールリーダー養成コースに入学しました平林茂将と申します。現任校の勝山市立鹿谷小学校に勤務して7年目になります。新潟県と福井県の公立高校

での講師を経て新採用となり、鯖江市神明小学校に3年

間お世話になりました。専門教科は理科(物理)です。

ここで、数年前までの私の学校現場での様子を紹介させていただきます。

同僚の先生方に植物や昆虫、鳥の名前を質問されますと「わたし、理科は理科でも物理専門なのでよく分からないんです。」と答え、子どもたちにも「自分で調べてごらん。」とはね返し、理科教員としての自分なりの

プライドを守ってきました。と、同時に、体育主任として多くの研修を重ね、子どもたちと汗を流すことに一生懸命になり、校内研究として国語や算数の授業作り、迫り来る指導主事訪問日や保護者参観日に備えて必死になる毎日でした。それは忙しく、充実感もある日々でしたが、追われるように仕事をするだけの毎日でもありました。しかし、2人のスペシャリストとの出会いが、私を広い世界に導いてくださいました。それは、環境保全推進コーディネーターとして勝山市に來られた前園泰徳先生（現；教職大学院准教授）と石井恭子先生（当時；福井大学教授）です。前園先生は、身近な自然の魅力を美しい画像と専門的な知識で伝えてくださり、それまでの自然に対する私の視点を劇的に変えてくださいました。石井先生は、「一緒に学びましょう。」と、木曜の19時から福井大学で行われていた、自主ゼミに誘ってくださいました。そこで出会った先生方の深い専門的な知識、子どもを見取る確かな力に感激し「大学ってすごい、もっと学びたい。」と、30代半ばで大学院進学を考え

始めたのです。

学校現場の課題は尽きず、しかも日々変化しています。ともすれば折れそうになっていた私の心に、一筋の光が差し込みました。それは、この2年間の大学院生活で、縁あって、多くのすばらしい方々と巡り会えるチャンスにいただいたことです。

「扉を開けて 中へおはいり 扉を開けて 過去をのぞいて 扉を開けて 未来をごらん 世界はすてきな wonderland 小さな手には のらないおもちゃ箱 知らないことは たくさんあるけど 知らないことは うれしいこと こらからいっぱい お楽しみがあるんだからね 扉を開けて 扉を開けて 知らない世界へ出かけよう」

私の今の気持ちには、折原みとさんのこの詩がぴったりにです。10代、20代のような、学びに対するわくわくした気持ちをもてた自分を大切に、みなさんと長く学びを共にできるような関係を築きたいと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

◆◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◆

共同探求者を育むプロセス13

～子どもたちと長期にわたる活動から見えてくる探求的学び～(個人報告書編)

福井大学教育地域科学部 探求ネットワーク (平成26年3月)

5月の土曜日のある光景。中国出身のMちゃん(小2)が、日本人の子どもたちと福井大学教育地域科学部の学生との間で「すごい光る紙」を作るその素材選びの過程でこんなやりとりをしていました。「M:青とオレンジのテープ。これとこれどっちがいい?、学生:どっちもいいね、M:じゃ、みんな集まって(みんなが顔を寄せる)、M:どれがいい?決めて。(オレンジのテープを持って)じゃあこれがいい人?(何人か手を挙げる)何人ある?(青のテープを持って)じゃあこれがいい人?(一人手を挙げる)オレンジがいい人青がいい人、学生:オレンジでやってみよっか。待って、このオレンジのテープで何するんだっけ?」このやりとりをみなさんはどのように見るでしょうか。いくつかの点で示唆的だと思いますが、私は一つに外国出身の子どもが自分の意見をごく普通に表明していること、さらにはそれを周りの子どもたちとスタッフがごく普通に受け入れていることに驚きました。

私が見たこの光景は探求ネットワークのかみすきブロックの一コマです。探求ネットワークは福井大学教育

地域科学部の学生が授業の一環として取り組んでいるいわば地域の子どもの共同探求プロジェクトです。学生と子どもたちは人形劇やかみすきなど9つのブロックに分かれ5月から12月までの間長期に渡り継続して共に活動を行なっていきます。実践的教員養成の場とも言えるこの探求ネットワークにおいて将来の教師の卵である学生らは何を考え何にぶつかり何を手に入れているのでしょうか。863ページにもわたるこの実践記録には一人一人の学生の学びのストーリーがあります。教員養成のあり方、そして教育のあり方を一人一人の学生の声が真摯に問うてくる、そんな重みと厚みのある実践記録です。(半原芳子)





教員免許状更新講習2013年度報告書 教育実践と教育改革

福井大学教育地域科学部・大学院教育学研究科（平成26年3月）

教育職員免許法第9条の3に基づき、「教員として必要な資質能力が保持されるよう定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち社会の尊敬と信頼を得る」ことを目的に開設された教員免許状更新講習は、今年度で6年目となる。同講習の必修領域を担当する本学教職大学院では、「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ——実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る——」をキーコンセプトに、専門職として探究し合う新しいメソッドを採り入れた更新講習にチャレンジしてきた。本報告書は、昨年度294名の受講者から提出された最終レポートの内、特に優れたものを選定してまとめたものである。

全体の構成は3部仕立てになっている。第1部は、「福井大学における更新講習(必修領域)の構成と展開」と称して、実践と省察の往還を中核にした本学教職大学院の教師教育改革の取組みと更新講習の拠って立つ理念等に係る総括担当者の解説が中心となっている。第2部では、「優れた教育実践記録から学ぶ」というタイトルのもと受講者からのレポートが35編掲載されている。これは、優れた実践事例資料を読み深め展開の筋道を辿る2日目の受講内容を反映したものである。更に第3部は、こうした他者の実践を核として、教師としての自らの歩みを振り返り今後の展望を開拓する目的で綴った「自身の教育実践を跡付ける」証となる報告が13篇載せられている。

開設初年度より本学の免許状更新講習は、教職大学院の教師教育のノウハウを活かし、実践と省察を重視した内容になっており、校種、年齢、地域等の枠組みを解いた少人数によるグループでの徹底した語り合い、聴き合いが基軸となっている。その拠り所となるのが、他者の実践記録をまとめたレポートであり、自身の実践を書き綴った報告書になるのであるが、これらは、繰り返し行われる丁寧な語り・傾聴の営みを経てより磨きがかかり完成品となっていく仕組みになっている。

従って、第2部、第3部に紹介されているレポートは、いずれも個別具体の実践事例を深く読み解いた上で受講者自らの日々の取組みが丁寧に綴られているため、極めて説得力がありかつ親近感を覚えるものばかりである。またテーマは、授業づくりや学級経営、気がかりな児童生徒への支援、教科教育、協働学習の在り方等々多岐に亘っており読み応えがある。教育現場の最

前線で子どもたちの教育に携わるいずれの読者にも、深い共感と大きな勇気・自信を与えてくれるものと確信する。

ところで、第1部でも紹介されているが、この更新講習が現在のフォーマットとして定着するまでには、受講者のニーズを踏まえた内容の検討や運営上の解決すべき課題が過去様々に横たわっていたことは容易に想像で

きる。当然のことながら、毎年、担当者相互の真摯な振り返りを基に改善や改革が行われてきたのであろうが、今般、同講習の内容と方法に関する受講者の評価が、「良い」と「だいたい良い」の両方合わせて98.1%にも至っている成果は特筆に値するものであり、偏に関係各位の努力と熱意の賜物であると認識している。しかしながら、一方で残された課題も少なくないようである。

優れた実践事例資料の更なる収集と吟味、学校教育の現状に即した講義内容の一層の精選、レポート作成や実践報告に必要な時間の確保等、項目・分野ごとに改善の余地はまだまだあるのだが、最も深刻かつ喫緊の課題の1つは、本学の必修領域講習受講者が年々減少の一途を辿っていることであろう。平成21年度本格実施初年度の必修領域講習受講者数を講習受講対象者数で除した割合は78.6%であったのに対し、昨年度のそれは37.2%、今年度(予定)に至っては31.2%と急落してきている。実際に受講した方々の満足度が極めて高いことから、講習内容やマネジメントに致命的な欠陥があるとは考え難い。言わずもがなであるが、講習受講対象者が講習実施機関を選定する時点に遡って、いかにして本学更新講習の魅力をアピール・発信できるか、効果的かつ揺るぎない対策の構築が急務であることを最後に付記しておきたい。(松田通彦)

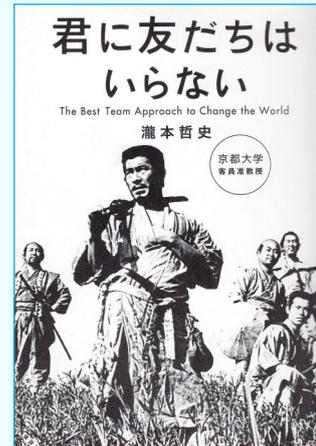


書評

「君に友だちはいない」

— The best team approach to change the world —

著者：瀧本哲史 出版社：講談社 出版年：2013年



昨年、話題になった本である。刺激的で挑発的なタイトルにまず、目を惹かれる。ただ、英題を見れば、この本の内容が「社会を変えていくための最高のチームの作り方」であることがわかる。ビジネス書に分類される本ではあるが、本書で語られている「これからの社会においてイノベーションを起こせるのは、天才的な個人の力ではなく、チームの力である」という考え方で、「良いチームの具体的な構築方法や運営方法」などは、一般にも広く適用可能だ。個人的には、学校での教師の協働、そして、教職大学院のスタッフのチームの作り方にも通じる点があるように思うし、実際に福井大学の教職大学院では、着実に理想的なチームづくりが進められていることを再確認することにもなった。

1章では、様々な変革を成し遂げたチームの例を挙げ、天才的な能力があっても1人だけではそれが社会で大きく花開かなかったことを示している。映画「7人の侍」からチームの大切さを説いていく手法が面白い。ここで強調しているのは、成功するチームには、年齢、履歴、スキルなどにおいて、高い多様性があることである。

2章ではJohn Katzenbachの著書より、成功したチームは、以下のような特徴があることを提示するところからスタートする。

- 1) 少人数である
- 2) メンバーが互いに補完的なスキルを有する
- 3) 共通の目的とその達成に責任を持つ
- 4) 問題解決のためのアプローチの方法を共有している
- 5) メンバーの相互責任がある

そこから3章以降の後半へは、実際にどのようにチームを作れば良いのか、社会において比較的なじみやすい事例を中心に語られている。これまでの著作同様、特に若手を意識して書かれている。興味深いのは、教育に関する話題が多いことである。学力低下、貧困による教育機会の格差、社会のニーズと学校の教育との乖離、いじめ、教師の能力差など、日本や世界の様々な教育の課題に触れている。問題の根源を鋭く突きながらも、若い世代を中心としたチームがその課題に立ち向かって大きな成果を生み

出している実践を多数紹介すること

で、若い世代が「自分も行動を起こそう」と奮い立つきっかけを提示しているように感じる。学生だけでなく、現職の教師にも読む価値があるだろう。日本の社会がグローバル資本主義への過渡期にあることや、優れた教師の授業がいかに未来の世代を変えるうえで重要になるかを知ることで、教師の存在意義を捉え直す絶好の機会になると思うからだ。

自己肯定感に乏しい人に、救いの道が示されているのも面白い。最初から突出した才能がなくても、「育てる」ことができると自信を持って書かれている。そのために必要なのは、「良い環境」であることは言うまでもない。どこに身を置くか、どういった人がまわりにいるか、で才能を育成できるか否かが決まってくるという意見である。これには私も強く同意する。教育の持つ力があらためて示された気がした。

著者の本業は投資家であるが、一方で、京都大学において高い人気を誇る起業論の教鞭もとる人物である。私にとって、本書は瀧本哲史氏の著作の3冊目となる。きっかけは、私のもとで学んでいた学生が「この著者は、前園先生がいつも言っていることととても近いことを書いている」と「僕は君たちに武器を配りたい」という彼の本を紹介してくれたことである。読んでみると、私が直感的に言っていたことをビジネスの実践から整理して明示されたような衝撃を受けた。また、現在の教職大学院において異端な履歴の私の存在を肯定的に捉え直すことにもつながった。「より良い社会を自分たちで創るノウハウ」を教育で伝えたいという意志や、「常識を一度壊してみる」という視点は確かに共通するものがあった（実は元々は社交的ではないところも類似しているが、私は残念ながら金銭的な成功には彼と違って縁遠い）。

本書の感想は、おそらく人それぞれでかなり差があると思われる。老若男女が感動して涙を流したり、こぞって一念発起したりする類の本ではない。例えば、既得権益にしがみつこうような人は違和感や嫌悪感を抱くかもしれない。また、本書には、ある

一定以上の学力を有するか、それなりのポジションにいる人のみにしか通用しないという意見も読者の感想から散見される。私としては、教職大学院に集う学生、教師、スタッフがどのような感想を持つのか興味がある。すでに本書で語られていることに到達している方々にとっては、別段新しいことはないかもしれないし、偏りのある意見としか捉えられないかもしれない。ただ、人それぞれ何らかの刺激は受けるように思う。

本書の「君に友だちはいない」というタイトルの本意は、後半徐々に暗示され、最後に明確に語られる。大きな目標と、そこへの高い志がある人にとって、ネットワークの発達した現代における「た

だつながらだけの友人」と「その関係維持に費やす時間や労力」に意義があるのかを問うている。

1つ言えるのは、「何かを変えよう」という意思のない者には、本書は何も響かないということだ。いや、そもそも本書を紹介しても興味すら抱かないだろう。まあ、そういう方は、「良いチーム」の構成メンバーになることに生涯縁がないと思われるから関係ないか。

「良いチーム」をどう作るか、そのチームがどのような成果を生むか、実践できる場がここ福井大学の教職大学院にはある。正解や最短ルートのない教育の世界。試してみる価値は十分にあるだろう。

(前園泰徳)



21世紀の知識基盤社会に生きる力を育て
子どもたちの生活と成長を支える

教師の実践力を高めるために

OPEN Petit! CAMPUS

開催日:7月12日(土)・10月18日(土)・
10月25日(土)・11月15日(土)・11月22日(土)
時間:9:20~14:20
会場:福井大学教育地域科学部1号館6階コラボレーションホール

教職大学院説明会開催致します!!

- 大阪会場** 梅田センタービル (大阪市北区中崎西2丁目4番12号)
8月2日(土) 13:30~16:00 1階会議室G
11月8日(土) 13:30~16:00 1階会議室F
- 京都会場** メルパルク京都 (京都市下京区東洞院通七条下ル東塩小路町676番13)
8月3日(日) 13:30~16:00 6階会議室4【桃】
11月8日(土) 13:30~16:00 5階会議室2【桂】
- 名古屋会場** Time Office名駅 (名古屋市中村区名駅2丁目4番12号アストラレー名駅3階)
8月23日(土) 13:30~16:00 3階 TimeB
11月9日(日) 13:30~16:00 3階 TimeB
- 東京会場** FUKURACIA東京ステーション (東京都千代田区大手町2-6-1春日生命大手町ビル3階)
11月16日(日) 10:00~12:00 6階会議室E
- 福井会場** 福井大学文京キャンパス (福井市文京3丁目9-1)
12月20日(土) 15:00~ 教育地域科学部1号館6階
コラボレーションホール

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院

■ お問い合わせ・申し込み方法

氏名・所属・連絡先メールアドレス・参加希望日を明記の上、福井大学教職大学院 dpdfukui@yahoo.co.jp までメールにてお申し込みください。
なお、メールの件名には「オープンキャンパス参加」と明記してください。

Schedule

- 7/21 mon-7/23 wed 集中講座 (1a) 7/24 thu-7/26 sat 集中講座 (1b)
- 7/28 mon-7/30 wed 集中講座 (2a) 7/31 thu-8/2 sat 集中講座 (2b)
- 8/18 mon-8/20 wed 集中講座 (3a) 8/21 thu-8/23 sat 集中講座 (3b)
- 9/20 sat 教職大学院入試 (第1次)

【編集後記】

今年は、本当に梅雨らしい梅雨が続きました。学校は夏休みに入り、いよいよ夏本番です。教職大学院では夏期集中講座が始まりますが、各学校でもたくさんの研究会、研修会が企画され、まさに学びを深めるチャンスです。普段できないことにチャレンジしたり、これまでの取組を振り返ったりしながら、「学び続ける教師」として実りの多い夏を過ごしたいと思います。(小林真由美)

教職大学院Newsletter No.65

2014.7.21発行

2014.7.21印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdfukui@yahoo.co.jp